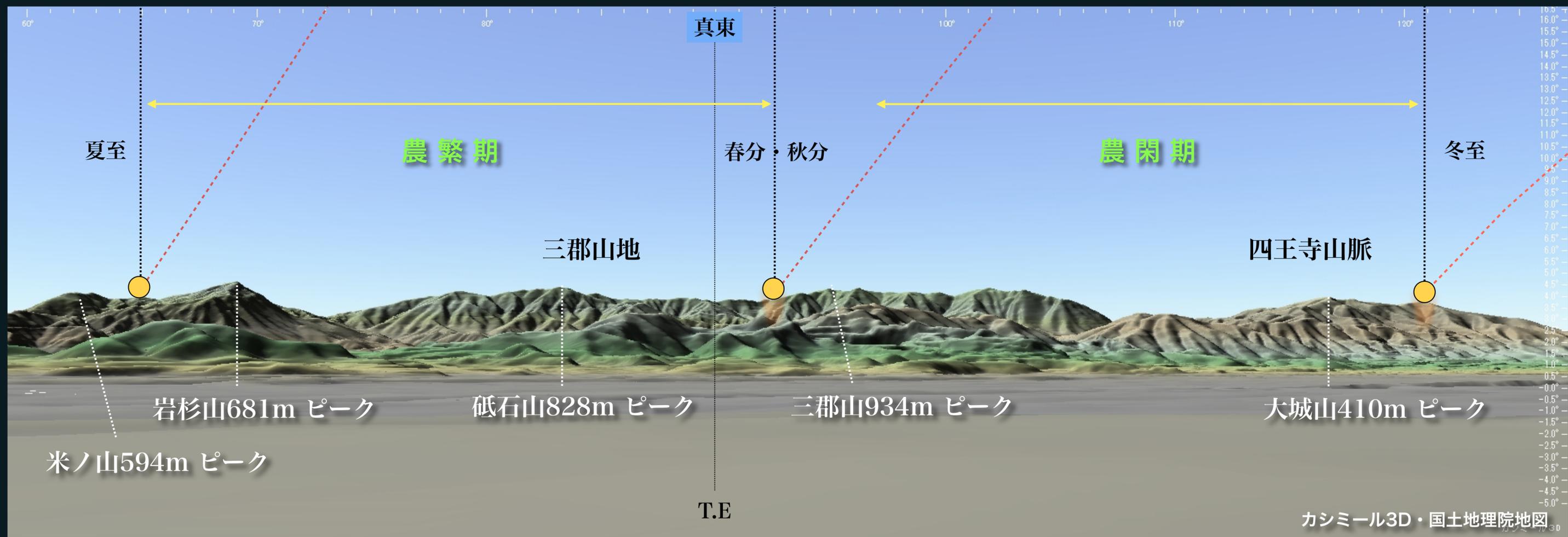


神武東征譚の背景を考える

—景観史学からの考察—



北條芳隆（東海大学文学部教授・奈良女子大学客員教授）

北條報告の構成

大型建物D

平原1号墓

吉野ヶ里遺跡

1. 日の出暦と水稲農事暦の概要
2. 弥生前期の日の出暦
3. 奈良盆地に再現された日の出暦
4. 平原農事暦の奈良盆地への転写
5. 日本神話と考古学

中国龍山文化後期の陶寺遺跡で発見された天体観測施設

日の出・月の出暦計（前2,300年頃）

現中華人民共和国山西省



伝説上の五帝「堯」

1年を366日とし3年に1回閏月をおく太陰太陽暦



定住生活を始めた縄文時代前期以降の集落からは日の出の方角の変化を見れば季節の移ろいを知ることができた

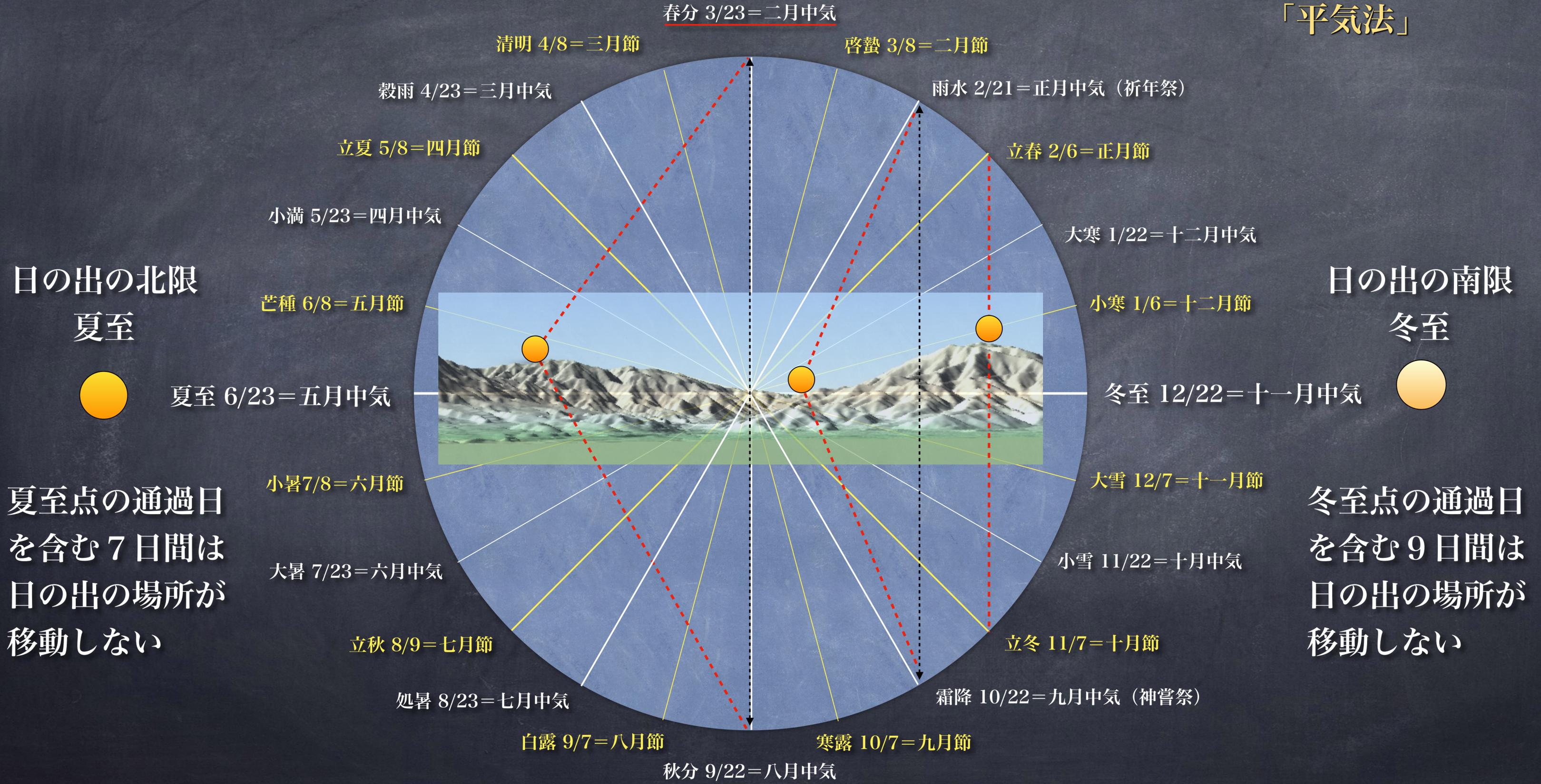
それが**日の出暦**

柱間の隙間から差し込む太陽や月の光を手前の分度器にて定点観測

太陽赤緯の一致を利用する日の出暦

二十四節気と太陽黄経

「平気法」



奈良県唐古・鍵遺跡から見た冬至と春分の日の出



龍王山520mピークが年間の日の出方位の中央値

春分・秋分の前後7日間の日の出の
変化は年間を通じてもっとも顕著



三輪山からの日の出が冬至

冬至を中日とする前後4日間は見か
け上の日の出の位置が変わらない

春分・秋分は文明段階になって成立する高度な概念だとの見解（クライブ・ラグルス）
が世界の考古天文学の定説

中国山東省の6世紀代水稲農耕作期と日本列島近世の稲作農事暦

表1 中国山東省の6世紀代水稲作季と日本列島の近世の稲作昨期

地域	年代	品種	浸種・播種	田植え	刈取り	典拠	出典
中国山東省	6世紀		三月を上時、四月上旬は中時、同中旬は下時（4月～5月）		霜降（10月下旬）	『齊民要術』（6世紀北魏）	西山1949文献
			<u>冬至後百十日後種稻（3月末）</u>	三月に稻を蒔く、五月に別種、夏至後二十日を過ぎれば不可（4月～7月上旬）		『齊民要術』（7世紀北魏）	農業出版社1961文献
佐賀藩・諫早地方	1843以前	早・中	<u>春彼岸に浸種,三十日後に揚げ七・八日後苗代に蒔（4月末）</u>	春土用過より四拾日後に植える（6月初旬）	<u>秋彼岸より二十日過ぎて苧初（10月10日以後）</u>	『郷鏡』（天保14年写,1843）	嵐1975文献
	1843以前	晩	<u>春彼岸に浸種,三十日後に揚げ七・八日後苗代に蒔（4月末）</u>	六月土用二十数日前（6月25頃）	秋土用過ぎて二十日で苧（10月下旬）	『郷鏡』（天保14年写,1844）	
対馬・佐須	1722以前	記載なし	<u>彼岸終りに浸種,二拾日余に壱日干して蒔く（4月中旬）</u>	夏至の前後拾日間（6月中下旬）		『老農類語』1722	
対馬・豊崎三村	1722以前	記載なし	春土用の中過ぎ（4月下旬）	上田は梅雨中頃（6月下旬）,中下田は梅雨初（6月中旬）	九月節の初頃（10月上旬）	『老農類語』1722	
対馬・伊奈二村	1722以前	記載なし	八十八夜頃（5月初旬）	半夏生の数日前より植始（6月下旬）	秋土用中頃（10月下旬）	『老農類語』1722	
肥後全般	1821～43	早稲	<u>二月播種（3月）</u>	四月下旬（5月）	八月	『肥後国耕作聞書』1821・22・43	
		赤物（太唐米）	三月上旬（4月）			『肥後国耕作聞書』1821・22・43	
		中稲	三月上旬（4月）	四月下旬	<u>八月から九月下旬まで</u>	『肥後国耕作聞書』1821・22・43	
		晩稲	三月上旬（4月）	四月下旬	十月十五日まで（11月下旬）	『肥後国耕作聞書』1821・22・43	
南予（愛媛）	17世紀	早稲	<u>二月彼岸「二月」（3月下旬）</u>	四月初から二十日「四月」	六月末から七月初「七月」	『清良記』*「」内は『四季作物種子取事』17世紀	
		中稲	三月初「三月」	四月末「四月・五月」	<u>八月末「八月・九月」</u>	『清良記』*「」内は『四季作物種子取事』17世紀	
		晩稲	三月中「三月」	五月中節前「五月」	九月初「九月」	『清良記』*「」内は『四季作物種子取事』17世紀	
		野稲	三月初「三月」	直播-四月	記載なし「九月」	『清良記』*「」内は『四季作物種子取事』18世紀	
安芸藩（広島）加茂郡	19世紀か	早稲	<u>二月中から三月節入</u>	五月節入から夏至	<u>八月彼岸前後（9月下旬）</u>	安政年間『国郡志』19世紀	
		中稲	三月節入より数日過より三月中	五月中から半夏（6月下旬～7月初旬）	九月節入から秋土用（10月上中旬）	安政年間『国郡志』19世紀	
		晩稲	三月土用半ば過より四月節入	五月中過より六月節（6月上旬～7月上旬）	九月土用入から霜月節入（10月下旬～11月上旬）	安政年間『国郡志』19世紀	
河内中部（八尾）	1842以前	早・中・晩共通	<u>二月彼岸種籾浸</u> 、春土用播種	五月一日田植え	寒露過早稲苧、九月二十五日中稲苧、同二十九日晚稲苧	『家業伝』1842	

2. 北部九州地域における弥生前期の日の出暦

岩杉山 (681m)

砥石山 (828m)

三郡山 (934m)

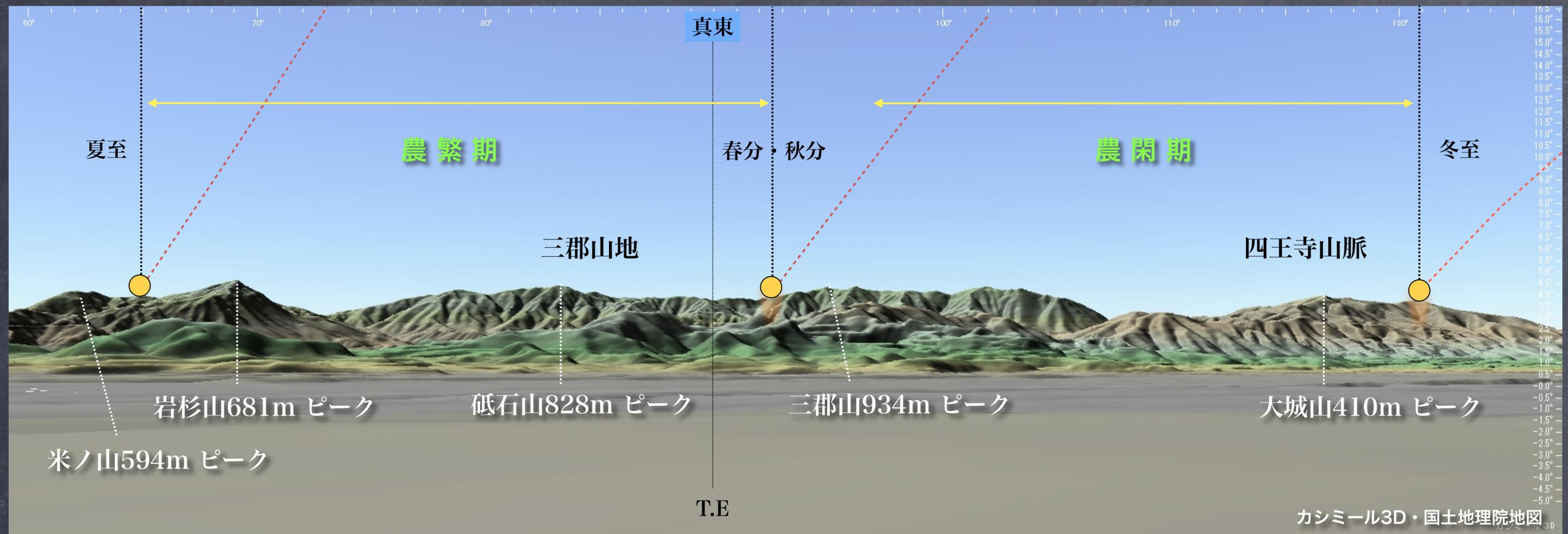
大城山 (410m)

板付遺跡前期環濠集落

Google Earth pro より



板付遺跡 前期環濠集落からみた年間の日の出（前500年）



夏至 日の出方位：TE+26.3°

春分・秋分日の出方位：TE-2.7°

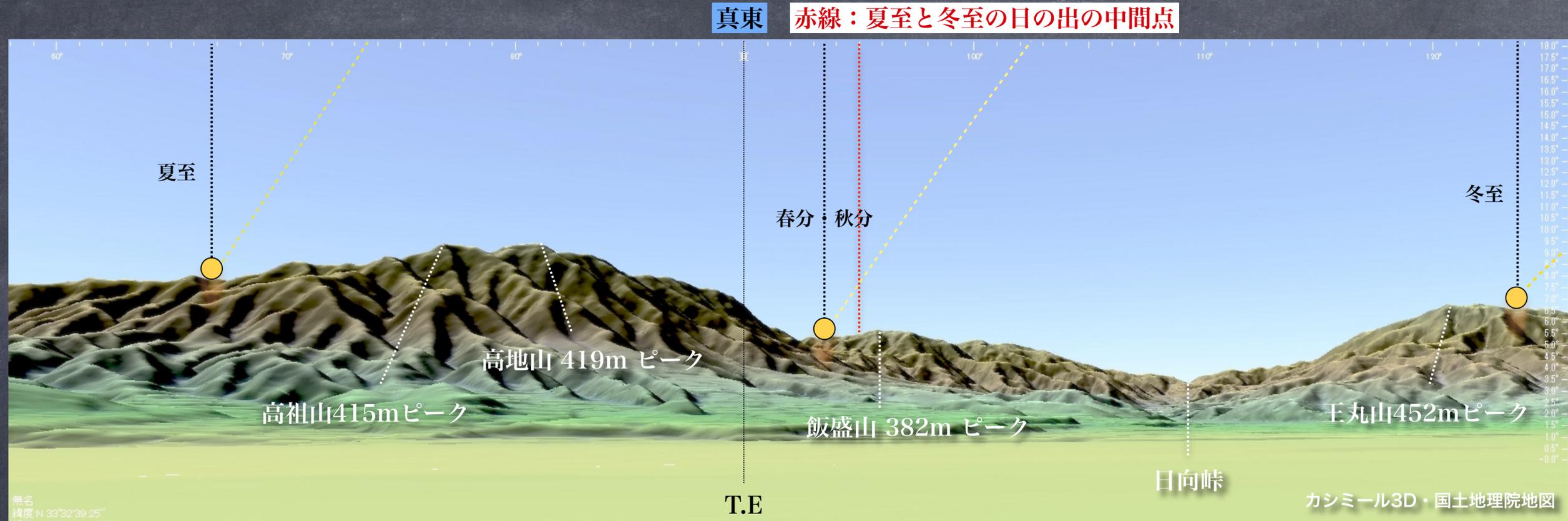
冬至 日の出方位：TE-31.7°

29.0°

29.0°

空間上の冬至-夏至のちょうど中央値となる地点から春分・秋分の日の出となる。現在の定気法による春分の設定で表示したが、この情景が偶然の産物とはみなしえない。入念な選地の結果だと考えられる。

三雲遺跡 前期加賀石地区（支石墓群）からみた年間の日の出（前500年）



夏至 日の出方位：TE+23.6°

春分・秋分日の出方位：TE-3.5°

冬至 日の出方位：TE-33.6°



中間点である飯盛山 山頂付近：TE-5.0°

三雲遺跡の日向かし側正面は高祖山であり、冬至の太陽は王丸山山頂から、夏至の太陽は高祖山の北斜面鞍部から昇る。また春分・秋分の日の出は飯盛山北斜面9合目からとなる。

冬至の日の出と夏至の日の出の中央値は「みなし二分」=後代の彼岸

春分・秋分の前々後7日間の日の出の変化は年間を通じてもっとも顕著

春秋両彼岸は春分と秋分をそれぞれ中日とする7日間の設定

冬至と夏至の両日の出の中間値を求めれば後代の彼岸の期間のどこかに当たる

日の出の北限
夏至



夏至点の通過日
を含む7日間は
日の出の場所が
移動しない

日の出の南限
冬至

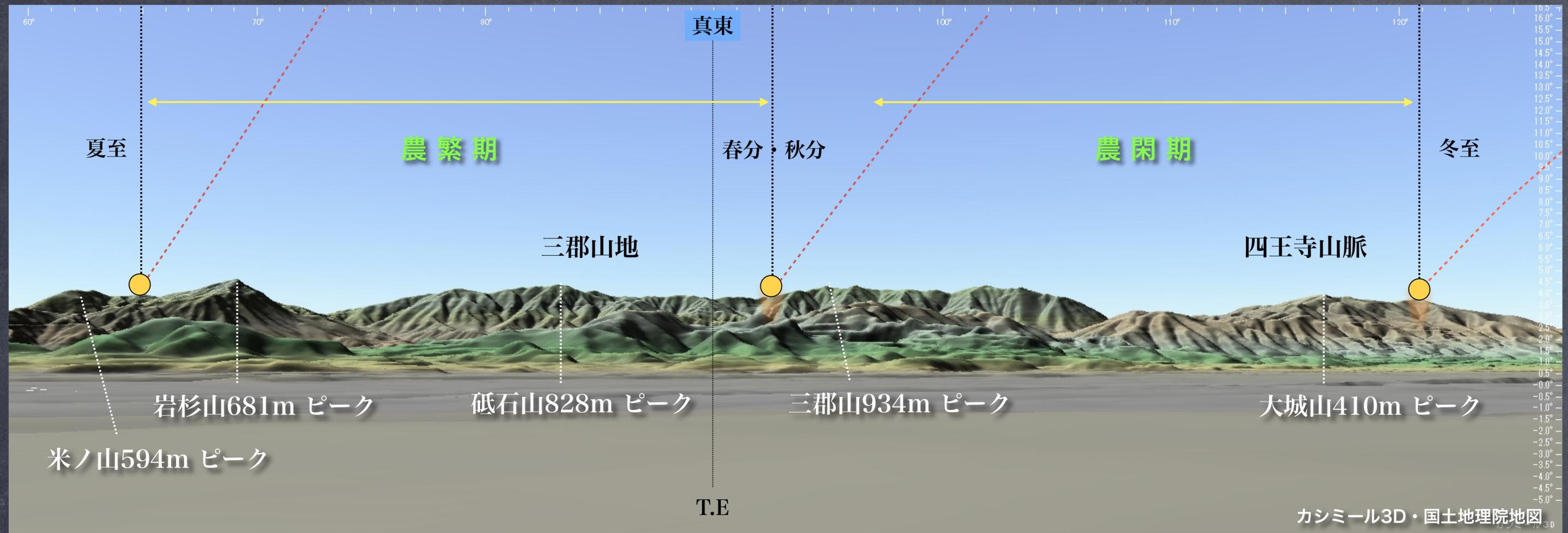


冬至点の通過日
を含む9日間は
日の出の場所が
移動しない



水稲農事暦としての二至二分は柔軟な期間設定

板付遺跡 前期環濠集落からみた年間の日の出（前500年）



夏至 日の出方位：TE+26.3°

春分・秋分日の出方位：TE-2.7°

冬至 日の出方位：TE-31.7°

29.0°

29.0°

たんなる農事暦を超えた、より高次元の暦を志向した形跡

3. 奈良盆地に再現された日の出暦



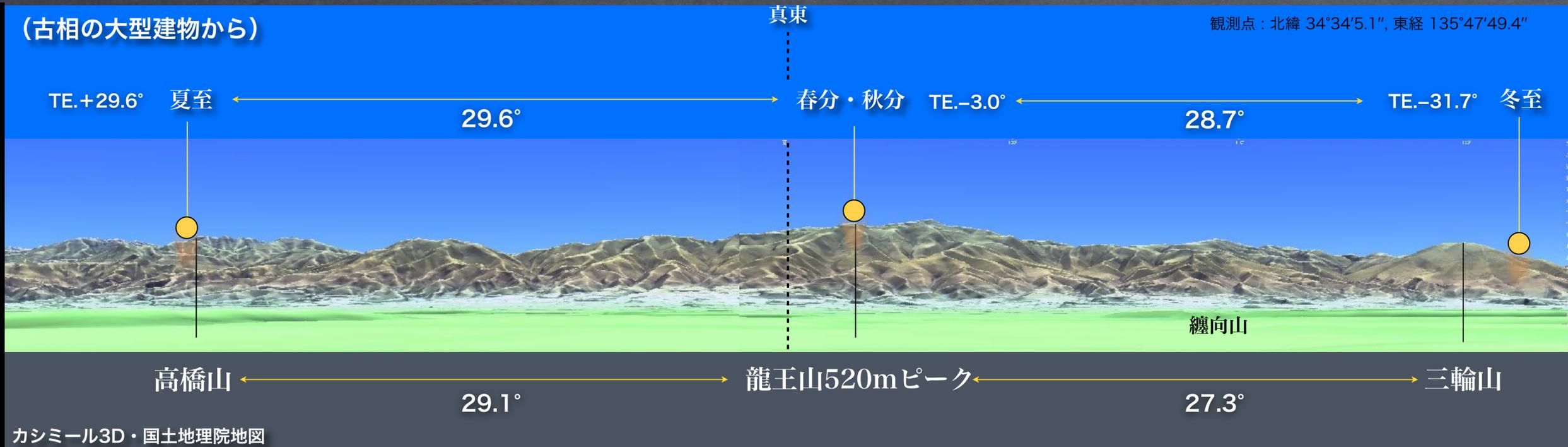
独立棟持柱建物は、東の山並の最高峰である龍王山頂に特別な意味をもたせた祭祀の場であった可能性が高い（龍王山の聖域化）



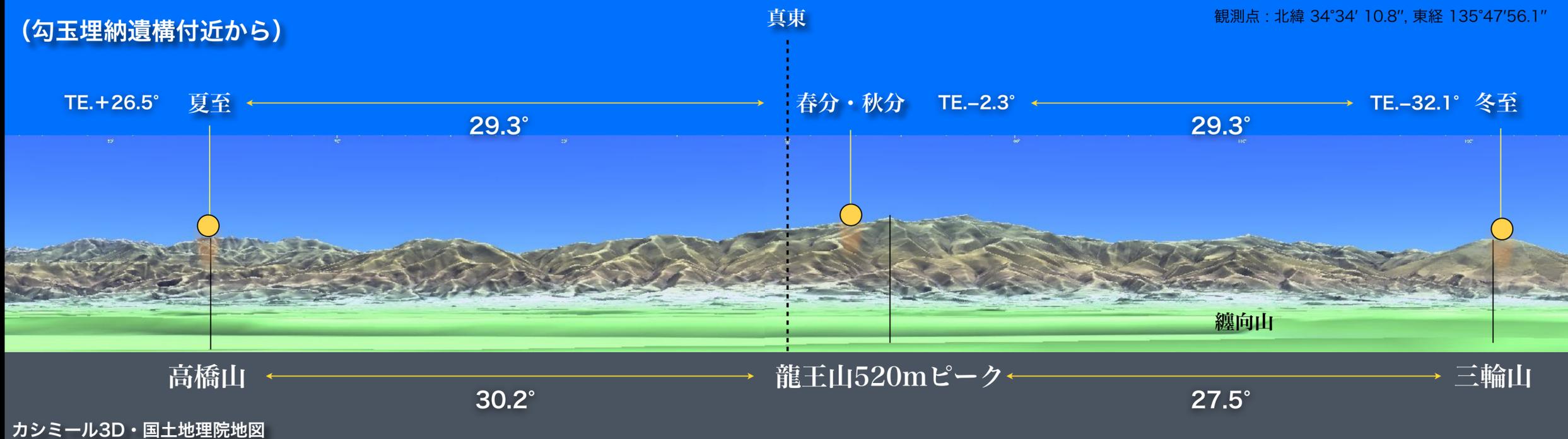
日向かしの峰である龍王山一帯は水源地側の峰でもあるため水神信仰の対象ともなった

唐古・鍵遺跡の2地点からみた年間の日の出（前300年）

（古相の大型建物から）



（勾玉埋納遺構付近から）



紀元前300年には龍王山520mピークからの日の出を二分とみなす日の出暦が用いられた可能性が高い

上段・中段の中間地点からだとは板付前期環濠集落からと同様の年間の日の出の情景となる

紀元前100年以降になると三輪山と冬至の日の出が一致する形が重視される日の出暦へと変化した可能性が高い

4. 平原農事暦の奈良盆地への転写

在野の考古学者原田大六によって1965年に発掘調査が実施され、日本列島最大の径46.5cmを測る内行花文鏡5面を含む40面の青銅鏡が出土。原田はこの大型鏡を「八咫鏡」（伊勢神宮ご神体）に該当する鏡種だと推定した。

埋葬の足下側の日向峠から昇る10月20日の朝の陽光で太陽の子を身籠もる神女の墓説を唱え、10月20日と伊勢神宮での神嘗祭の一致にも注目した。



写真は伊都国歴史博物館HP より

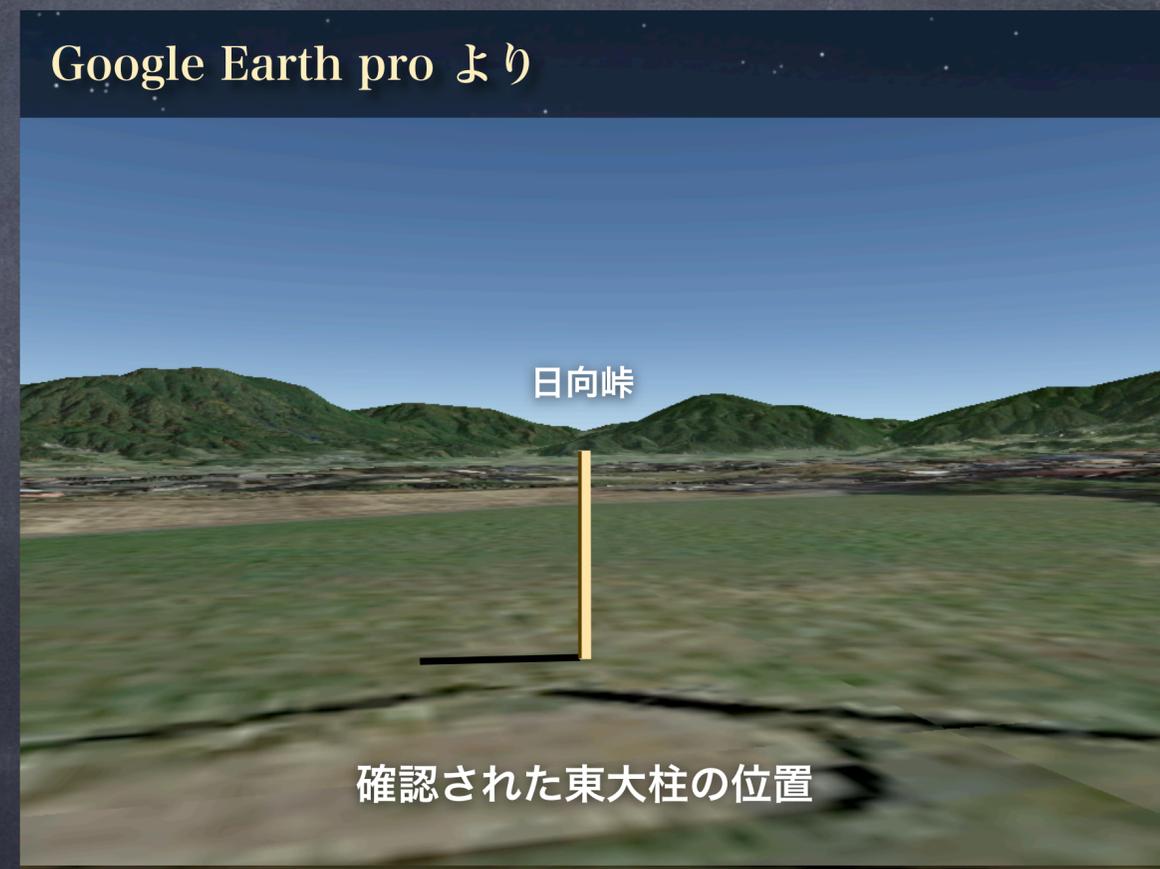
福岡県平原1号墓（弥生終末期）にみる日の出暦

1998年からの再調査によって、墳丘の東から「大柱」跡を確認。
日向峠に埋葬の主軸を向ける事実関係も再点検された。

10月20日の朝日と伊勢神宮・神嘗祭の関係



写真は伊都国歴史博物館HPより



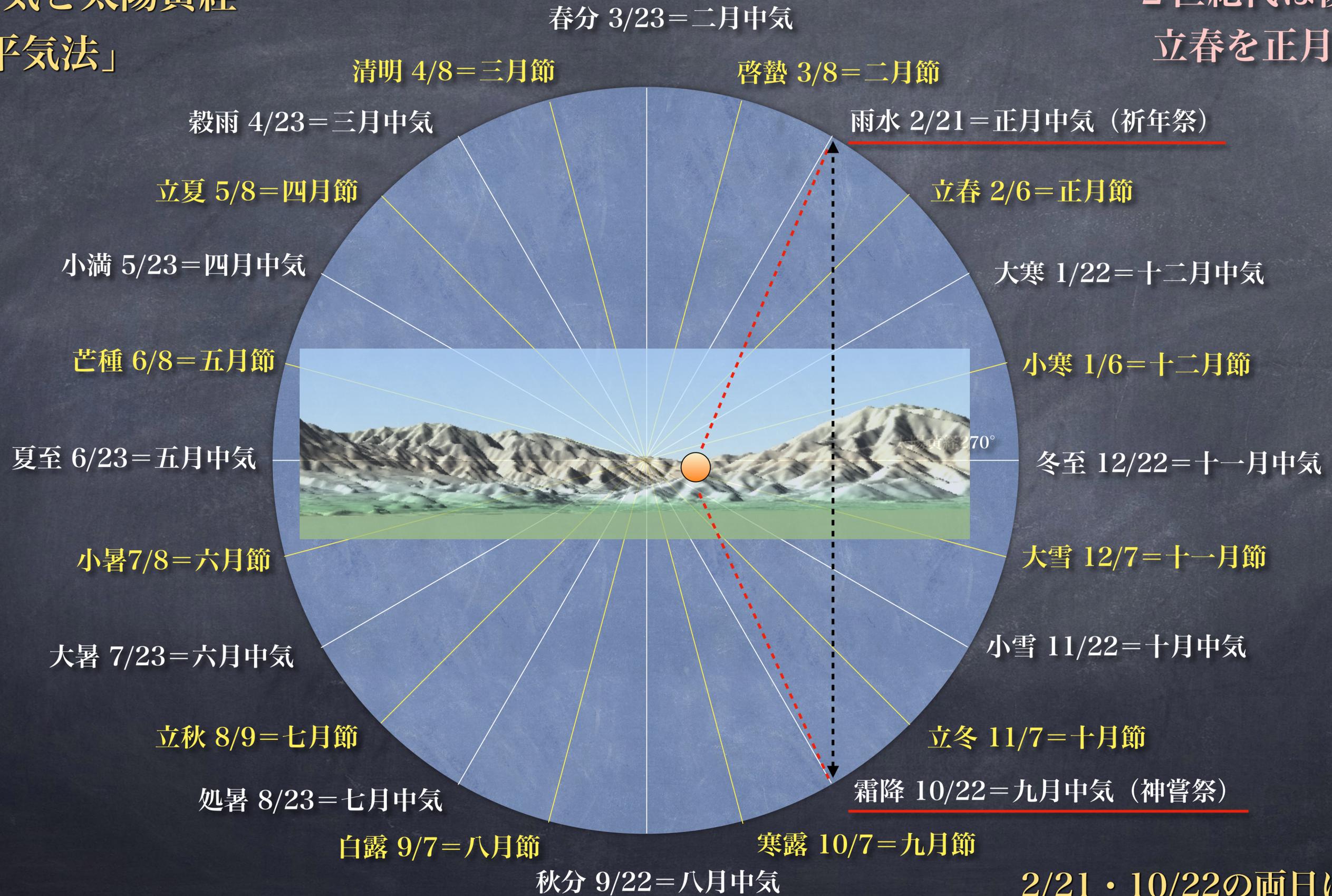
大柱は墓壙から日向峠に向けた方角上に介在する

二十四節気と太陽黄経

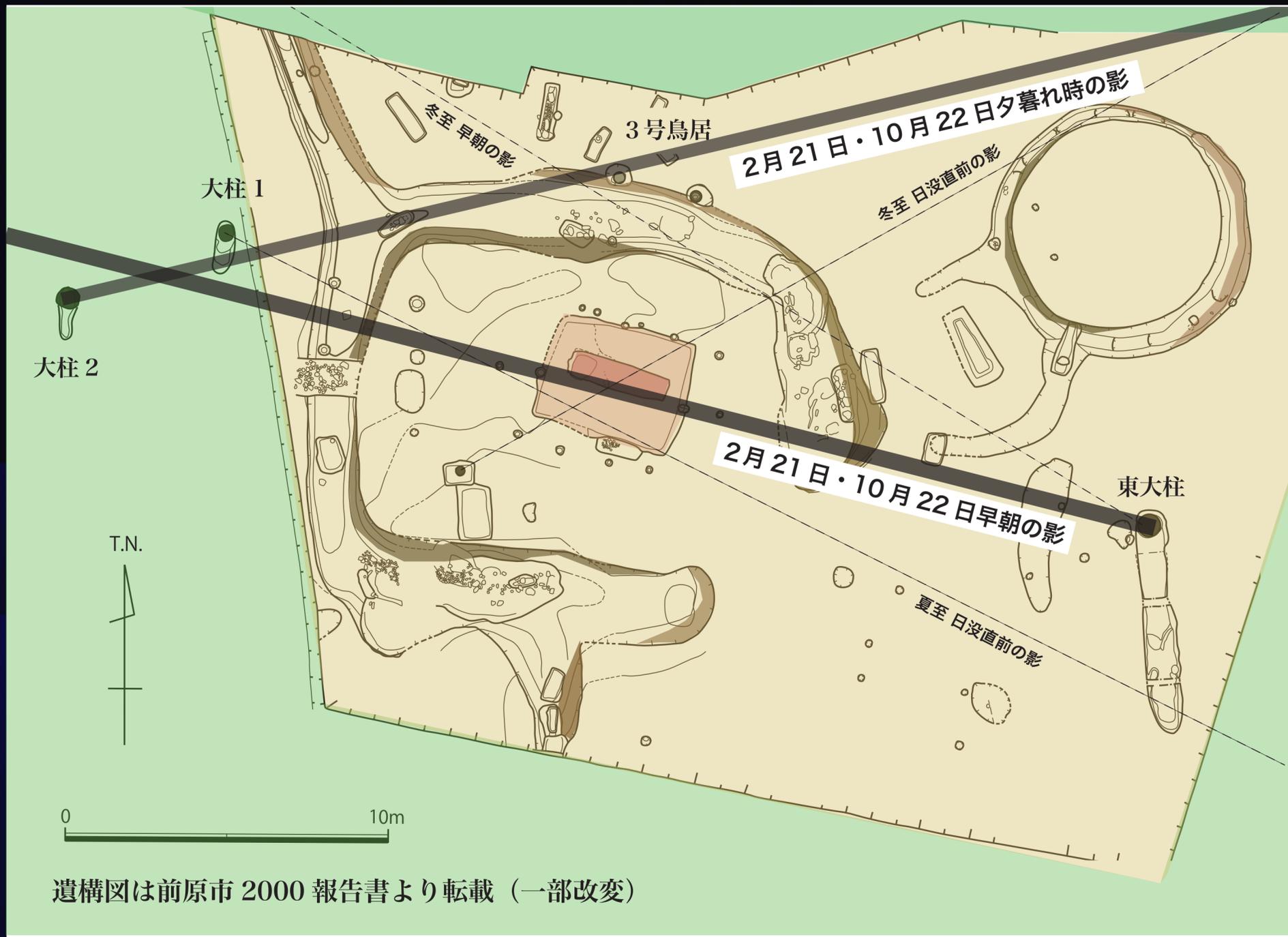
「平気法」

2世紀代は後漢四分曆

立春を正月節とする



2/21・10/22の両日は雨水と霜降



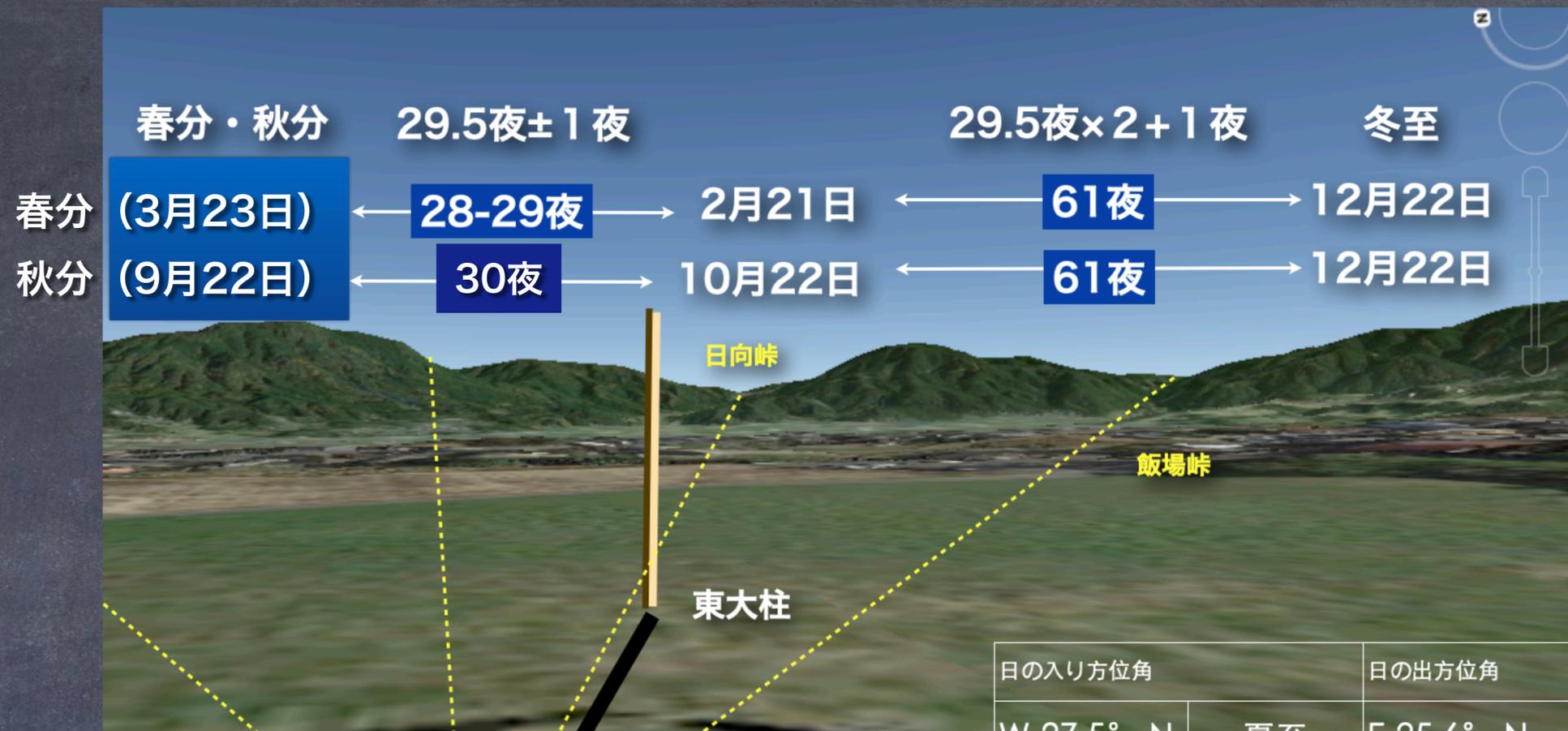
祈年祭 (伊勢神宮：2月17日～23日)



神嘗祭 (伊勢神宮：10月15日～25日)

平原農事暦の設定

(2月21日「祈年祭」と10月22日「神嘗祭」の組み合わせ)



雨水は冬至から4つ先の節気

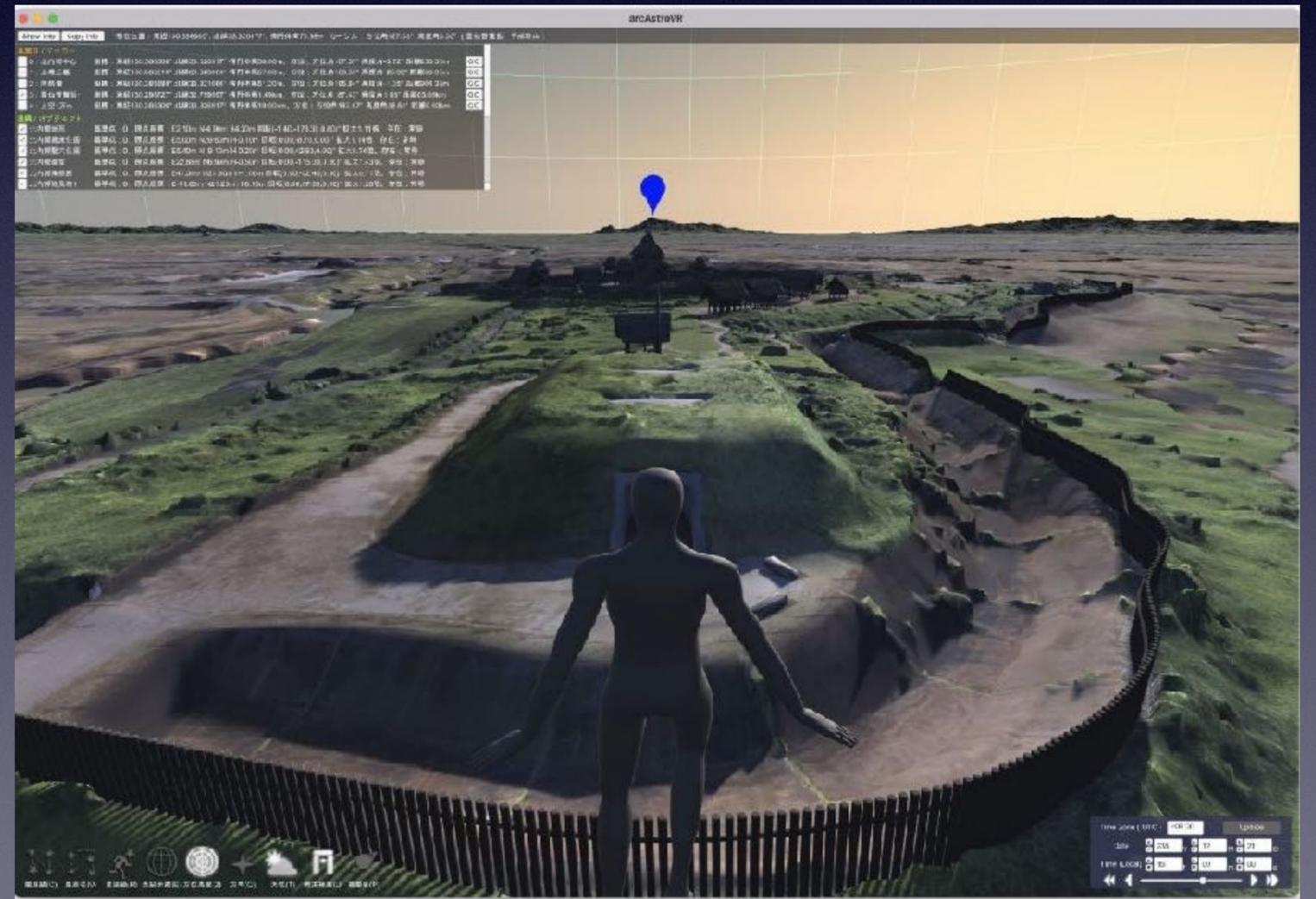
$$365.25 \text{日} \div 24 \times 4 = 60.875 \text{日} \rightarrow 61 \text{夜}$$

古代中国暦法での 2月21日は雨水、10月22日は霜降

佐賀県 吉野ヶ里遺跡南北両内郭の検討

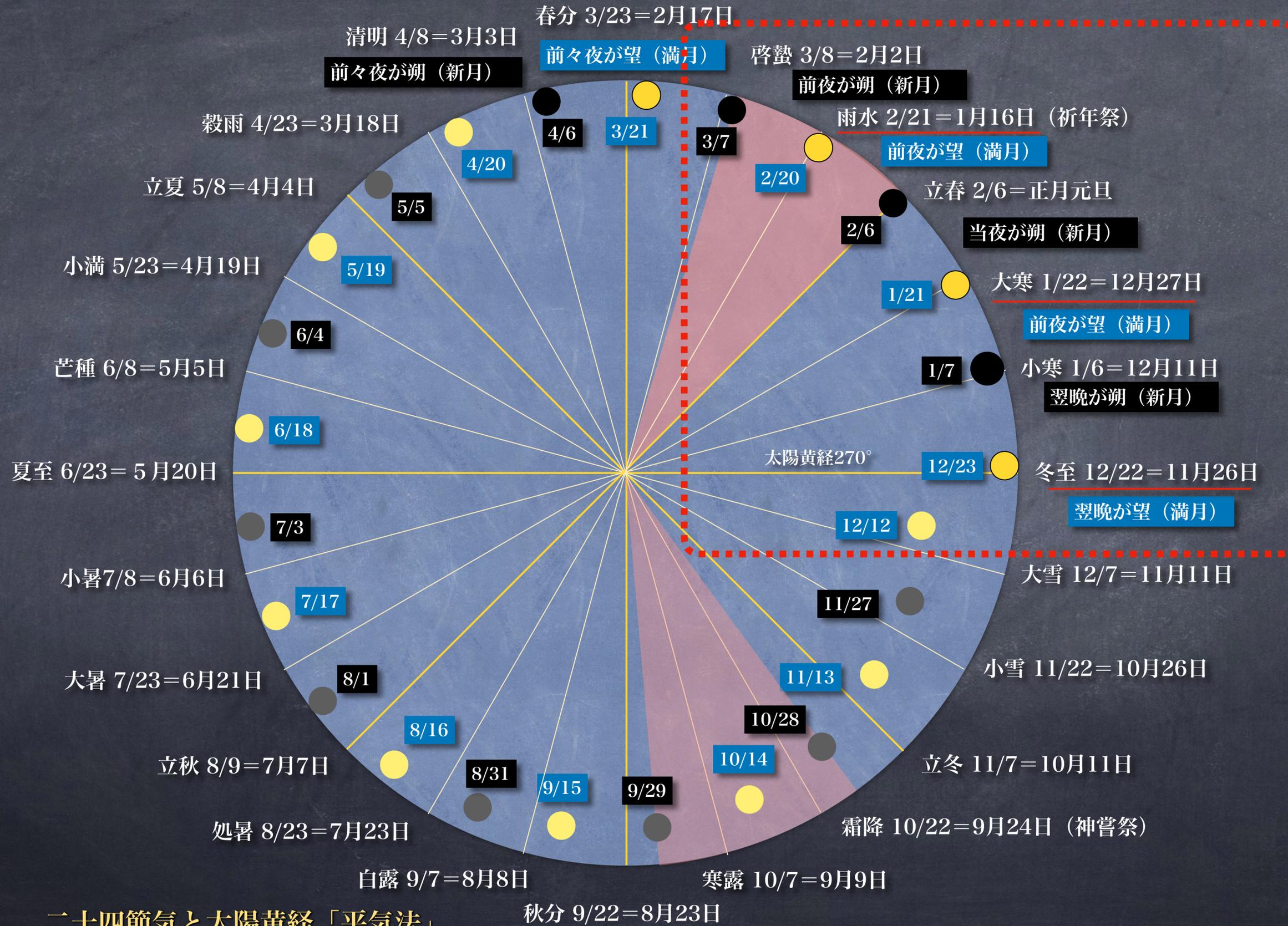


弥生終末期における月の祭祀

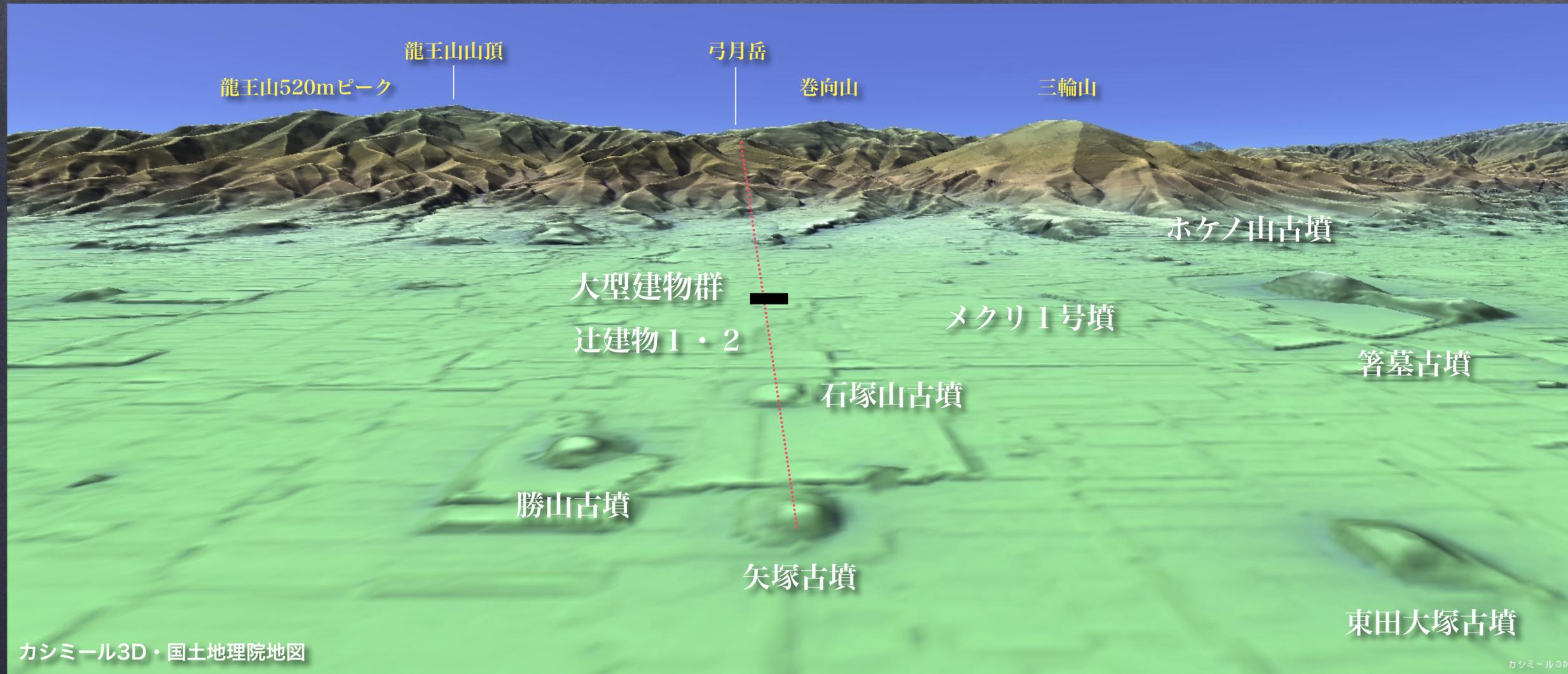


arc Astro VRの映像作成

前年冬至から啓蟄まで六つの節気と新月-満月が綺麗に対応する2016年と235年



奈良県纏向遺跡大型建物Dと日の出暦



2009年の現地説明会風景



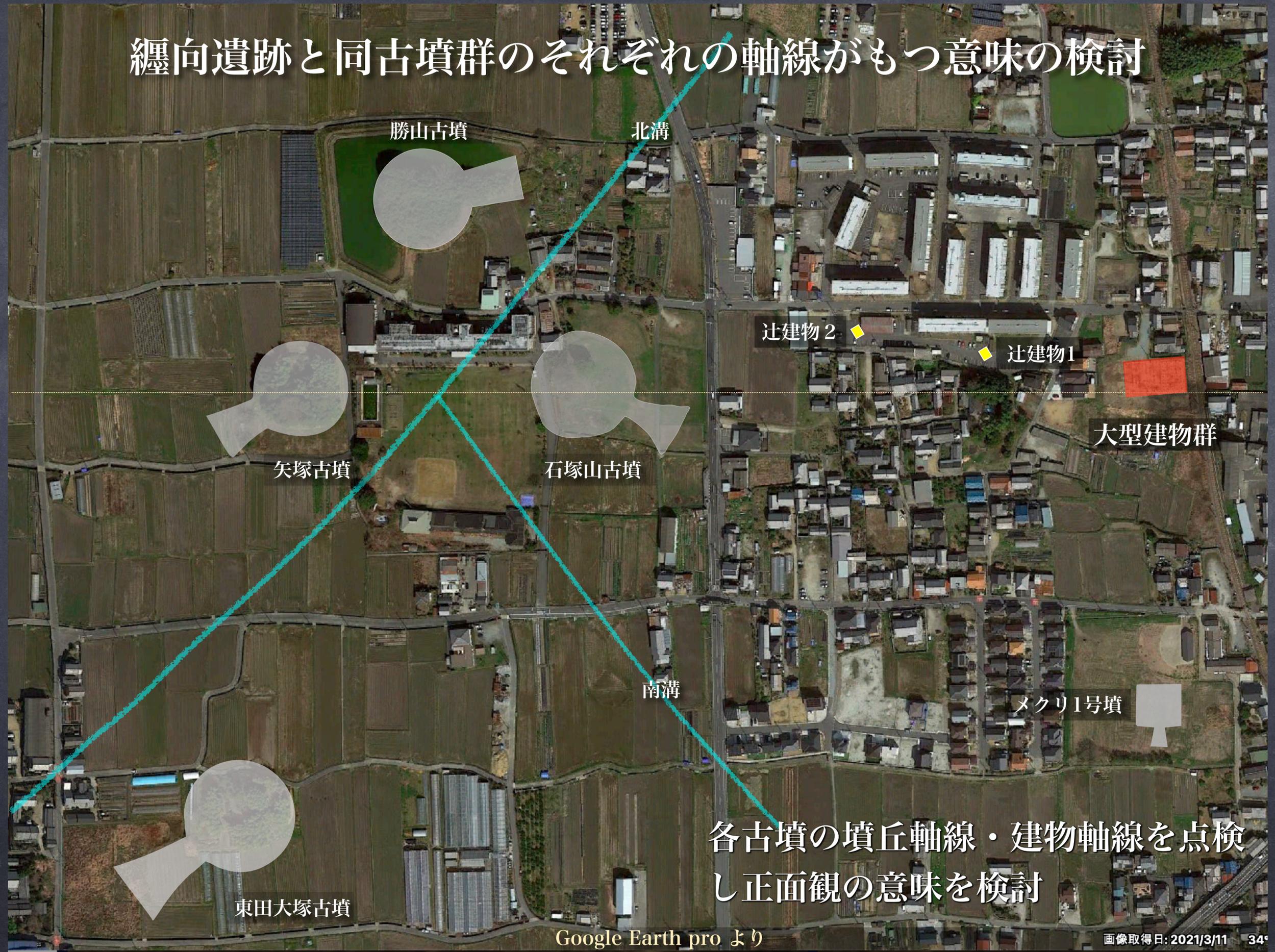
大型建物群の復元想像模型

2世紀末頃には出現し、4世紀前半までの初期倭王権の本拠地であったと推定される

纏向型前方後円（方）墳の本拠地だと理解される

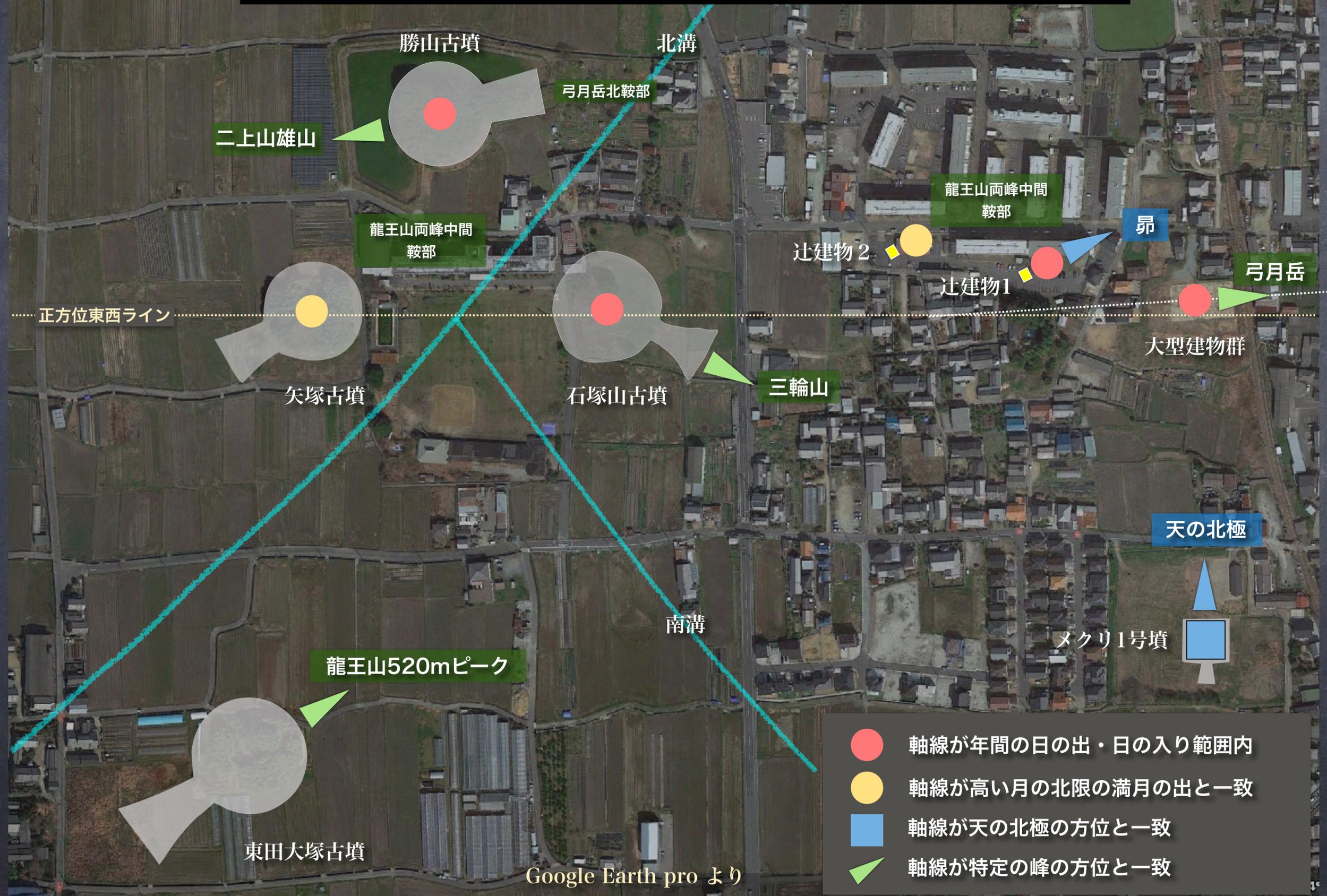
辻地区大型建物群は倭の女王卑弥呼の居館だとも指摘されている

纏向遺跡と同古墳群のそれぞれの軸線がもつ意味の検討



各古墳の墳丘軸線・建物軸線を点検し正面観の意味を検討

周辺景観への輪番的奉祭とでもいうべき状況



大型建物Dの正面観が弓月岳を向く意味の検討



西暦3世紀前半代の年間の太陽の出と高い月の出の南北両限界 = 「日向かし」



神田下種祭（伊勢神宮：4月上旬）

神田を舞台に開催される 春秋一对の祭礼日

稲の作季とおおむね対応する

2022年 4月11日・9月1日（平年）

237年4月12日・9月3日（平年）

248年4月12日・9月2日（閏年）



拔穂祭（伊勢神宮：9月上旬）

月の出北限界

夏至

立夏・立秋

春分・秋分

平原農事暦

立春・立冬

冬至

月の出南限界

後漢四分曆に沿った二至二分・四立の日付
(ユリウス暦-平気法)

夏至：6月23日

立夏・立秋：5月8日・8月7日

春分・秋分：3月23日・9月22日

平原農事暦：2月21日・10月22日

立春・立冬：2月6日・11月7日

冬至：12月22日



カシミール3D・国土地理院地図

大型建物Dは、弓月岳からの日の出と共に、のちの「神田下種祭」と「拔穂祭」に連なる春秋祭礼日の朝の陽光を正面から受ける施設であった

2022年 2月24日 7:08 (平原農事暦②-春)



2022年 10月19日 6:39 (平原農事暦②-秋)

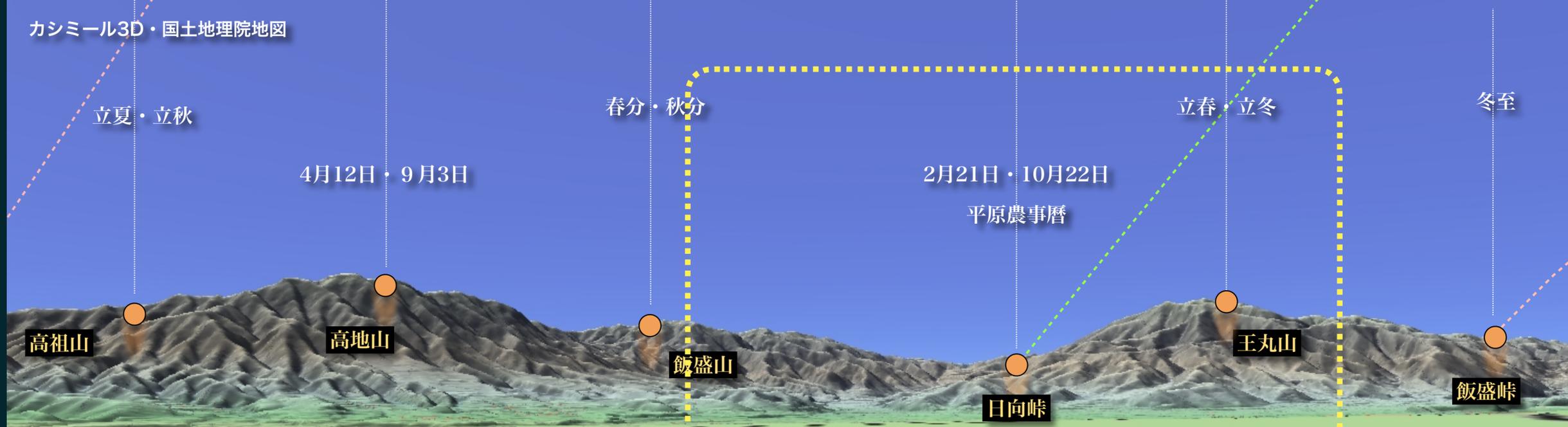


祈年祭 (伊勢神宮：2月17日～23日)



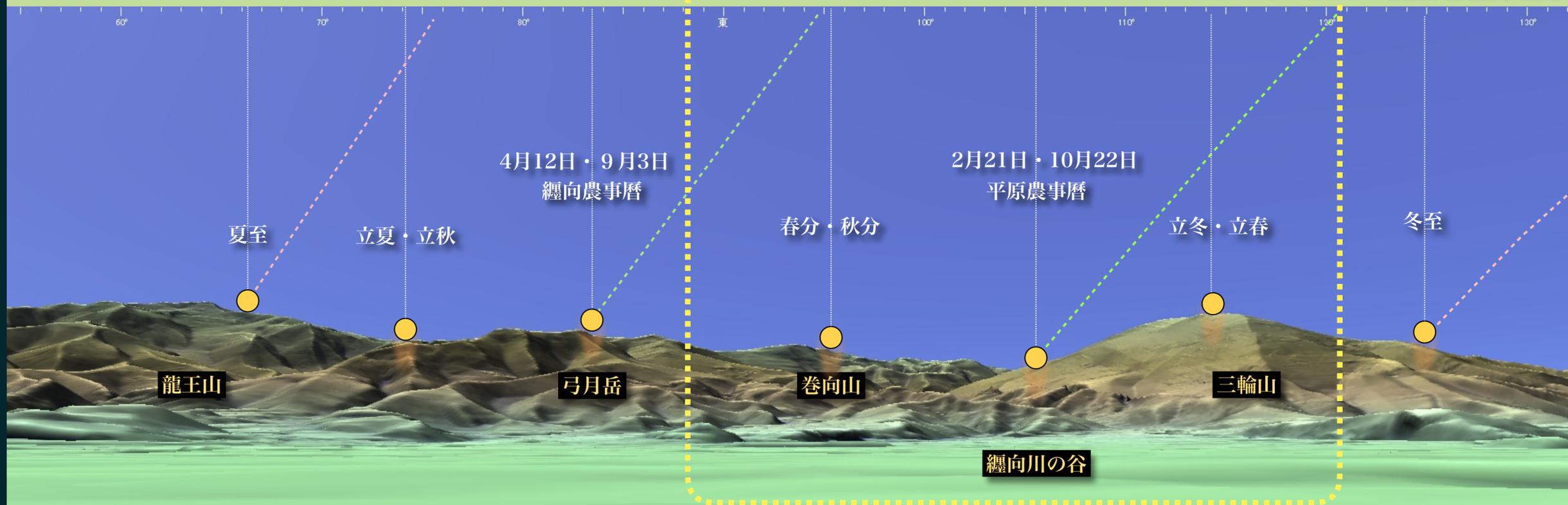
神嘗祭 (伊勢神宮：10月15日～25日)

祈年祭と神嘗祭の祭礼日は纏向遺跡大型建物Dからも「日の出暦」によって把握されていた可能性が高い



平原1号墓からの年間の日の出暦-二十四節気は平気法

日の出の定義は太陽の上端が稜線上から顔を出した瞬間



纏向遺跡大型建物Dからの年間の日の出暦-二十四節気は平気法

日の出の定義は太陽の下端が稜線上から顔を出した瞬間

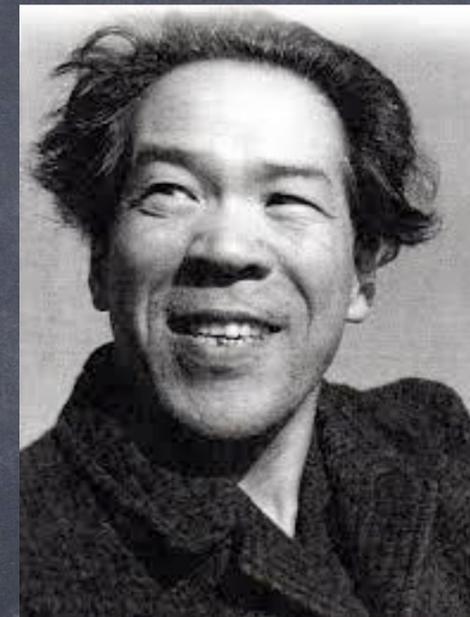
上段の日の出暦の情景を基礎に、下段は類似した情景を再現できる地点を選択した結果であった可能性が高い

伊都国で完成した日の出暦の情景が奈良盆地に転写されたと考えられる

暦の問題からみた「神武東遷」

二度に渡って発生した「神武東遷」

原田大六は「神武東遷邪馬台国大和説」を唱えた。今回の作業結果もそれを追認すべき状況である。「祈年祭」と「神嘗祭」「八咫鏡」の起源地は旧伊都国にあったと考えられる。それが古墳時代成立過程の実情であった。



ただし近畿地方における弥生文化の成立期にも同様の事態すなわち「神武東遷」が生じた。それが旧奴国板付遺跡から唐古・鍵遺跡への日の出暦の転写である。

弥生時代から古墳時代にかけての暦の変遷

原初的 日の出暦

二至・二分が基準

水稲作期の指標

水稲農耕体系に埋め込まれた日の出暦（太陽暦）が北部九州地域に移植され再現

板付遺跡前期環濠集落 → 唐古・鍵遺跡

「水稲農事暦」

派生的 日の出暦

二十四節気が基準

文明側との交流・計画的古墳築造

中国側太陰太陽暦の知識が北部九州地域へ到来し派生的な日の出暦が誕生（太陰太陽暦への模索）

吉野ヶ里遺跡南北両内郭

「平原農事暦」

平原1号墓 → 纏向遺跡大型建物群

「纏向農事暦」

中国太陰太陽暦が百済を介して倭王権に到来（文字を用いる太陰太陽暦の採用）

「辛亥年」 銘稻荷山鉄剣

元嘉暦

宋の暦法を直接移植

文明側との交流・支配秩序の維持

保存・温存

象徴化

坐東朝西のランド

スケープデザイン

奈良盆地における龍王山山帯の聖域化



唐古・鍵遺跡から見た龍王山の一帯は水源地の嶺でもあり風水にも叶う景観



古相の大型建物（復元模型）



2013年春分前々日の日の出

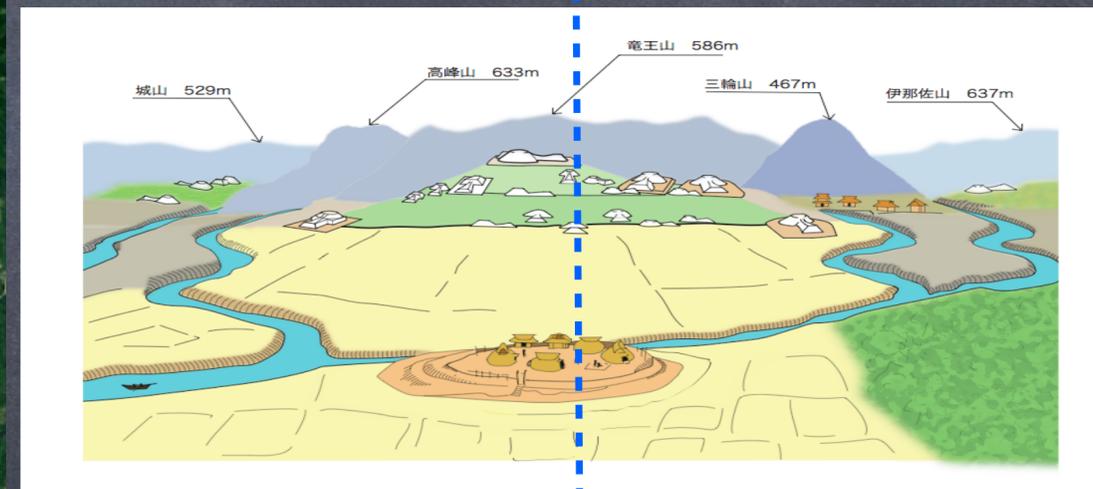
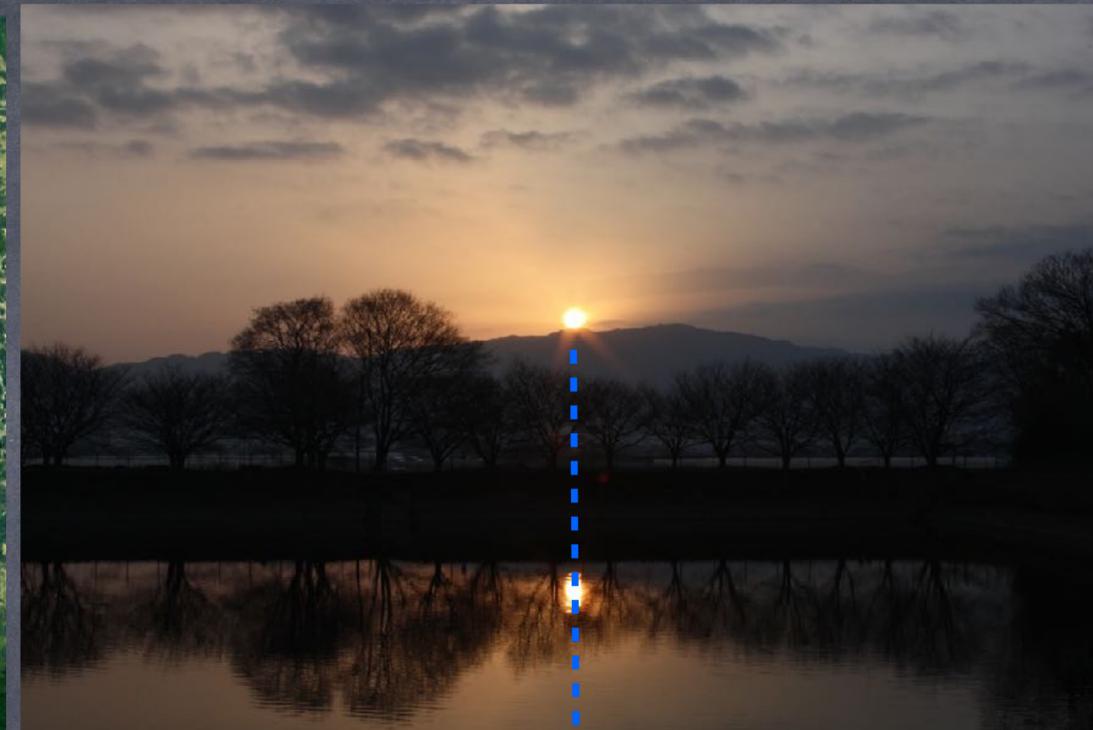
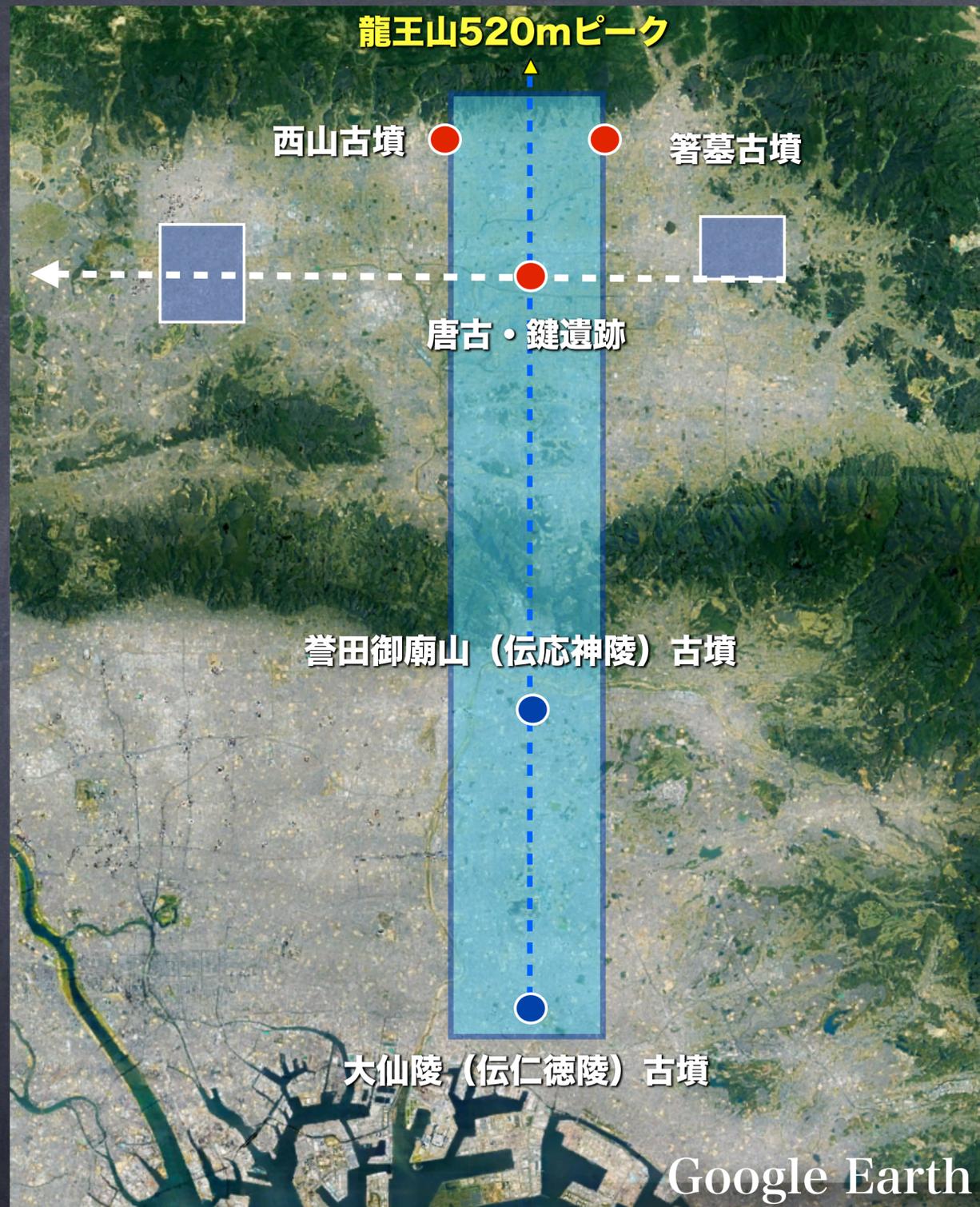


2013年冬至（12月25日の日の出）

高橋山の現状



山頂は灌木の生い茂る緩慢な高まり。ただし「八ッ岩」のある尾根の最高所であった。付近一帯にはスサノオと八岐大蛇伝承が残り、「八ッ岩」こそが石上神宮の本宮だとの言い伝えも残されていた。



「日の出の中央」を中心に据えた「坐東朝西」の儀礼空間
ランドスケープ・デザイン

岸俊男説の修正案・森浩一説の拡張案 (龍王山520mピークが中軸)

中国山東省の6世紀代水稲農耕作期と日本列島近世の稲作農事暦

表1 中国山東省の6世紀代水稲作季と日本列島の近世の稲作昨期

地域	年代	品種	浸種・播種	田植え	刈取り	典拠	出典
中国山東省	6世紀		三月を上時、四月上旬は中時、同中旬は下時（4月～5月）		<u>霜降（10月下旬）</u>	『齊民要術』（6世紀北魏）	西山1949文献
			<u>冬至後百十日後種稻（3月末）</u>	三月に稻を蒔く、五月に別種、夏至後二十日を過ぎれば不可（4月～7月上旬）		『齊民要術』（7世紀北魏）	農業出版社1961文献
佐賀藩・諫早地方	1843以前	早・中	<u>春彼岸に浸種、三十日後に揚げ七・八日後苗代に蒔（4月末）</u>	春土用過より四拾日後に植える（6月初旬）	<u>秋彼岸より二十日過ぎて苧初（10月10日以後）</u>	『郷鏡』（天保14年写,1843）	嵐1975文献
	1843以前	晩	<u>春彼岸に浸種、三十日後に揚げ七・八日後苗代に蒔（4月末）</u>	六月土用二十数日前（6月25頃）	<u>秋土用過ぎて二十日で苧（10月下旬）</u>	『郷鏡』（天保14年写,1844）	
対馬・佐須	1722以前	記載なし	<u>彼岸終りに浸種、二拾日余に壱日干して蒔く（4月中旬）</u>	夏至の前後拾日間（6月中下旬）		『老農類語』1722	
対馬・豊崎三村	1722以前	記載なし	春土用の中過ぎ（4月下旬）	上田は梅雨中頃（6月下旬）、中下田は梅雨初（6月中旬）	九月節の初頃（10月上旬）	『老農類語』1722	
対馬・伊奈二村	1722以前	記載なし	八十八夜頃（5月初旬）	半夏生の数日前より植始（6月下旬）	<u>秋土用中頃（10月下旬）</u>	『老農類語』1722	
肥後全般	1821～43	早稲	<u>二月播種（3月）</u>	四月下旬（5月）	八月	『肥後国耕作聞書』1821・22・43	
		赤物（太唐米）	三月上旬（4月）			『肥後国耕作聞書』1821・22・43	
		中稲	三月上旬（4月）	四月下旬	八月から九月下旬まで	『肥後国耕作聞書』1821・22・43	
		晩稲	三月上旬（4月）	四月下旬	十月十五日まで（11月下旬）	『肥後国耕作聞書』1821・22・43	
南予（愛媛）	17世紀	早稲	<u>二月彼岸「二月」（3月下旬）</u>	四月初から二十日「四月」	六月末から七月初「七月」	『清良記』*「」内は『四季作物種子取事』17世紀	
		中稲	三月初「三月」	四月末「四月・五月」	八月末「八月・九月」	『清良記』*「」内は『四季作物種子取事』17世紀	
		晩稲	三月中「三月」	五月中節前「五月」	九月初「九月」	『清良記』*「」内は『四季作物種子取事』17世紀	
		野稲	三月初「三月」	直播-四月	記載なし「九月」	『清良記』*「」内は『四季作物種子取事』18世紀	
安芸藩（広島）加茂郡	19世紀か	早稲	<u>二月中から三月節入</u>	五月節入から夏至	八月彼岸前後（9月下旬）	安政年間『国郡志』19世紀	
		中稲	三月節入より数日過より三月中	五月中から半夏（6月下旬～7月初旬）	九月節入から秋土用（10月上中旬）	安政年間『国郡志』19世紀	
		晩稲	三月土用半ば過より四月節入	五月中過より六月節（6月上旬～7月上旬）	<u>九月土用入から霜月節入（10月下旬～11月上旬）</u>	安政年間『国郡志』19世紀	
河内中部（八尾）	1842以前	早・中・晩共通	<u>二月彼岸種籾浸、春土用播種</u>	五月一日田植え	<u>寒露過早稲苧、九月二十五日中稲苧、同二十九日晚稲苧</u>	『家業伝』1842	



神田下種祭（伊勢神宮：4月上旬）

神田を舞台に開催される 春秋一对の祭礼日

稲の作季とおおむね対応する

2022年 4月11日・9月1日（平年）

237年4月12日・9月3日（平年）

248年4月12日・9月2日（閏年）



抜穂祭（伊勢神宮：9月上旬）

月の出北限界

夏至

立夏・立秋

春分・秋分

平原農事暦

立春・立冬

冬至

月の出南限界

後漢四分曆に沿った二至二分・四立の日付
(ユリウス暦-平気法)

夏至：6月23日

立夏・立秋：5月8日・8月7日

春分・秋分：3月23日・9月22日

平原農事暦：2月21日・10月22日

立春・立冬：2月6日・11月7日

冬至：12月22日



カシミール3D・国土地理院地図

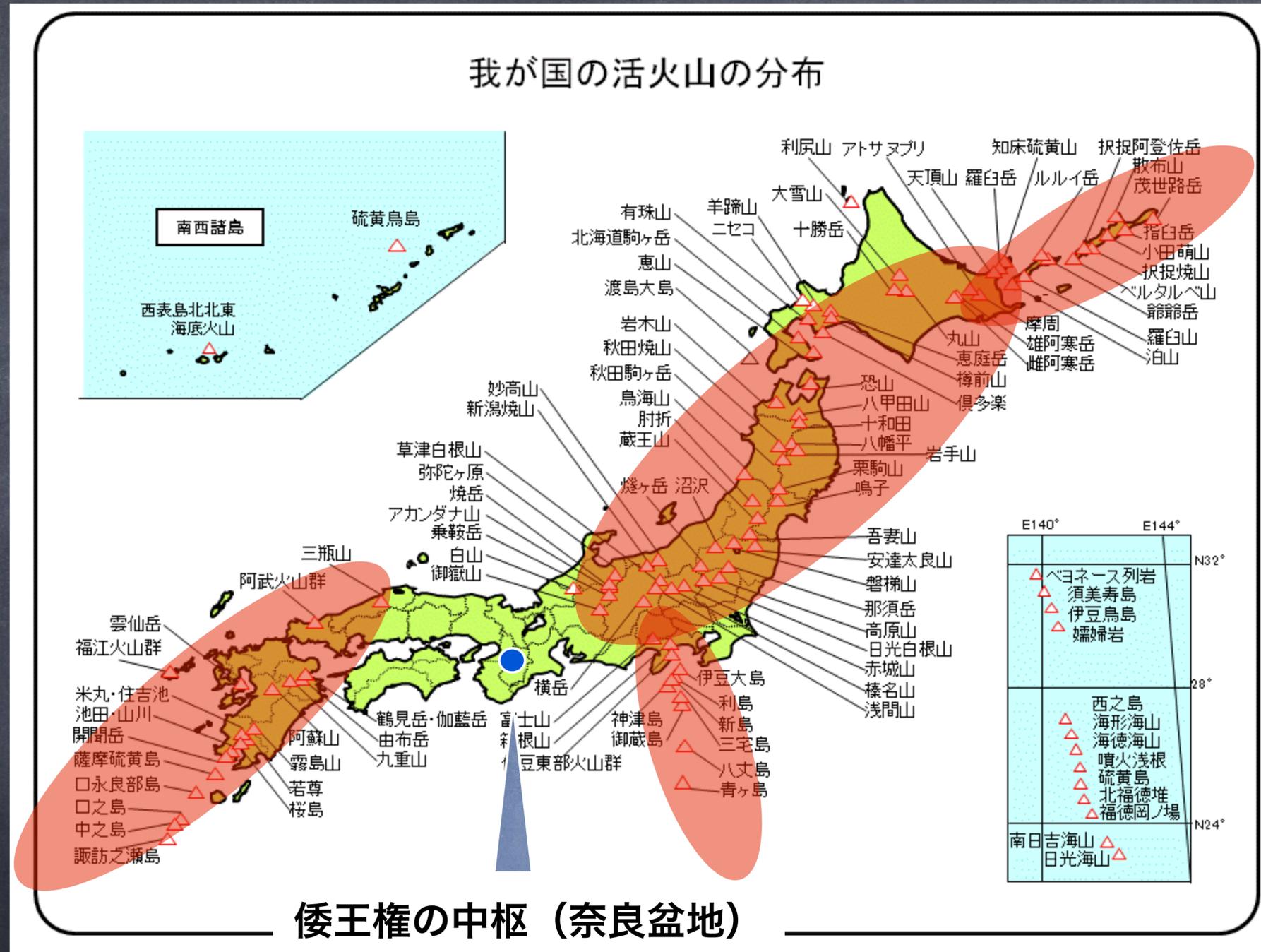
平原農事暦の秋霜降は、収穫された稲の徴税の日安としてこそ重視された。対になる春雨水は、稲
粃の貸与「出拳」の始まり到来を意味するものであった。

5. 日本神話と考古学



静岡県富士宮市丸ヶ谷戸遺跡（3世紀末頃）

日本列島における火山地帯（活火山の分布）



九州の南半部と中部以北に偏在する。四国や近畿地方には不在

最初の「王」の就任儀礼は吉備の楯築弥生 墳丘墓で完成し実演された



遺骸を「龍王」に就任させる即位儀礼であった可能性が高い
「龍王」の象徴としての特殊器台

多数の巨石を30 km以上も海路運び入れる空前絶後の造宮事業
海民集団の積極関与なくしては実現不可能な一大事業

「龍王」の具体的なイメージの源泉と楯築墳丘墓



「龍王」は噴煙とともに天空に昇る
火山は「龍王」の住み処に相応しい

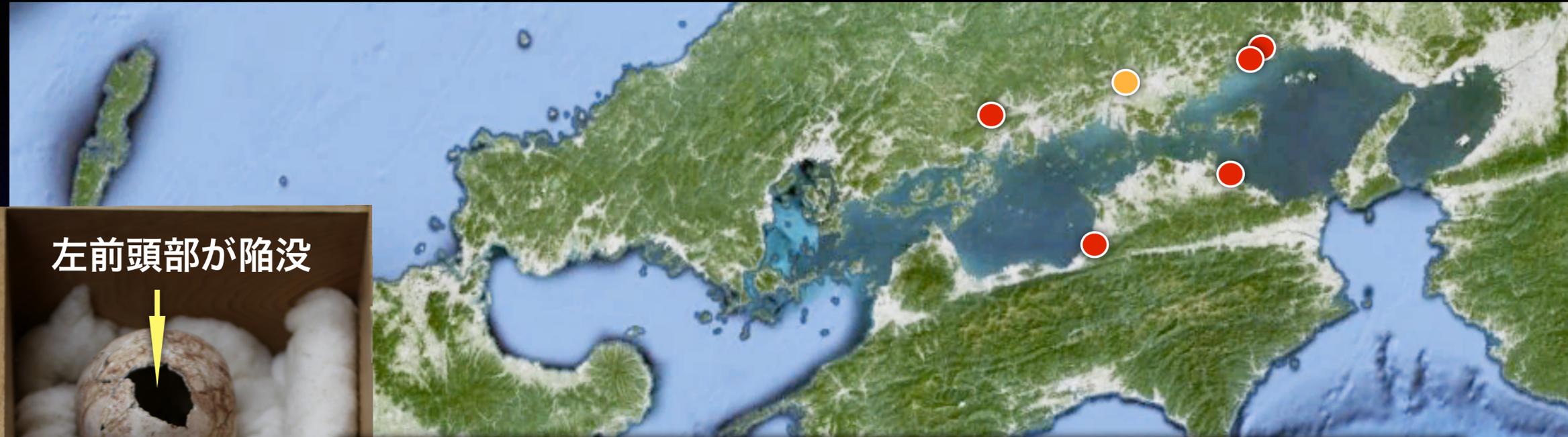


有明海沿岸部の諸地域集団は、龍のイメージをもっとも具体化させやすい景観のもとで生きた人々だった
楯築墳丘墓は人工の火山を創り上げる目論みだった可能性

経路2 瀬戸内海ルートで近畿地方へ及んだ貝輪の習俗



瀬戸内海沿岸部に残る濃厚な南方系の要素



左前頭部が陥没



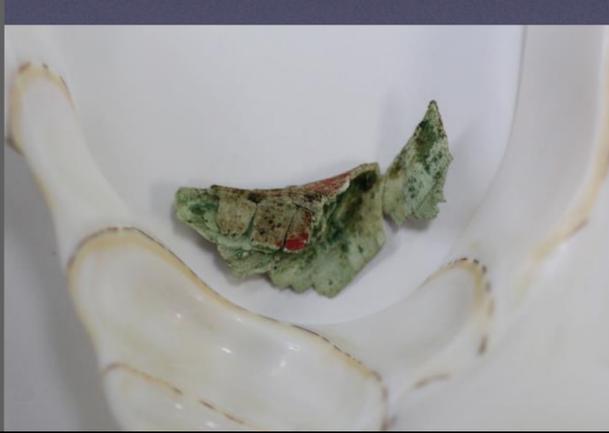
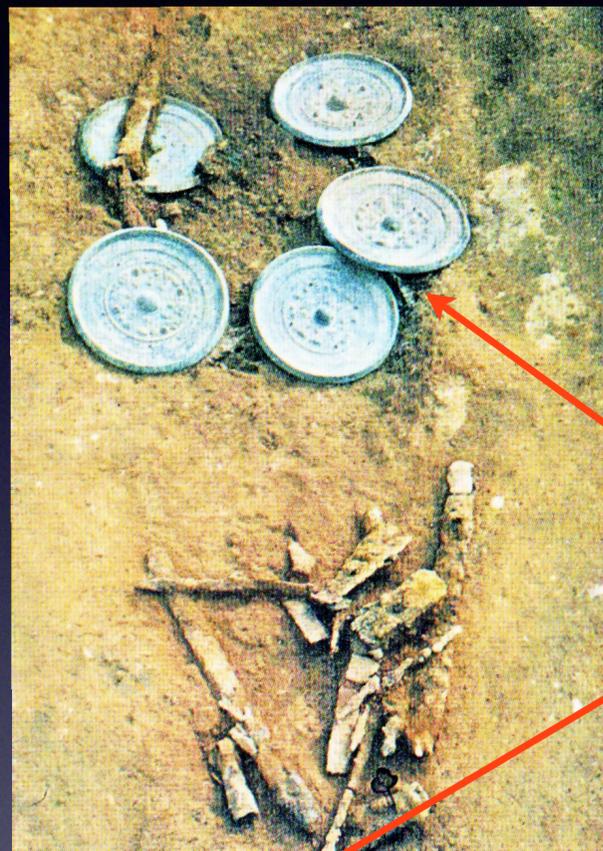
ゴホウラ・イモガイ貝輪の濃密な分布
楯築弥生墳丘墓の弧帯文と直弧文の施されたゴホウラ貝輪
南からの移住者集団（海洋民か）が残した可能性の高い埋葬



香川県観音寺市鹿隈箱式石棺墓群 8号（古墳時代前期中葉）

石製品の深い緑色は、倭王権が玉素材への材質転換にあたり、やむなく選
択せざるをえなくなった色味。

貝の乳白色こそが本来求められた色味であった。



兵庫県権現山51号墳出土貝輪

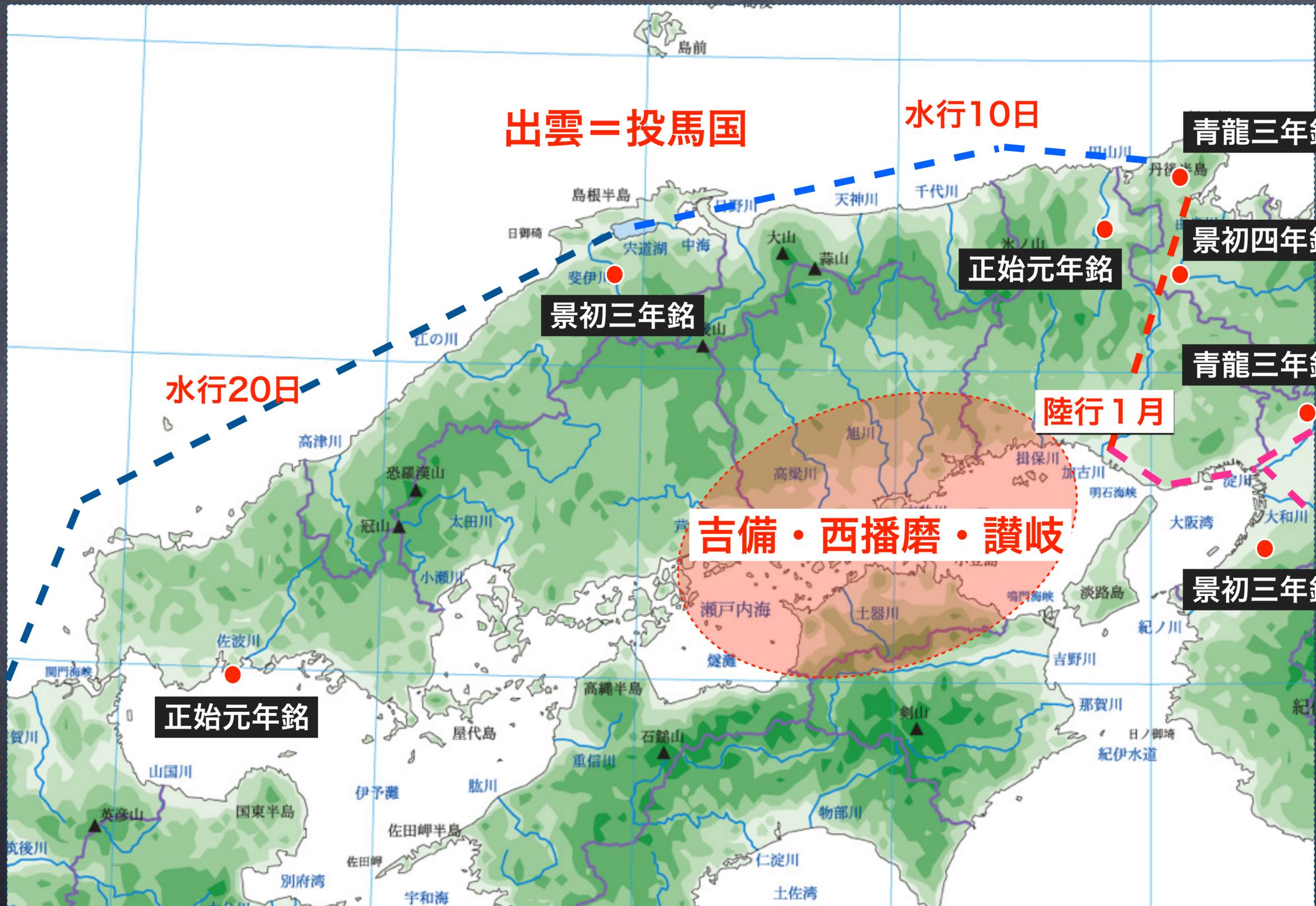
北方系と南方系を融合させた倭王権の祭り



付録 水林彪氏論への対案

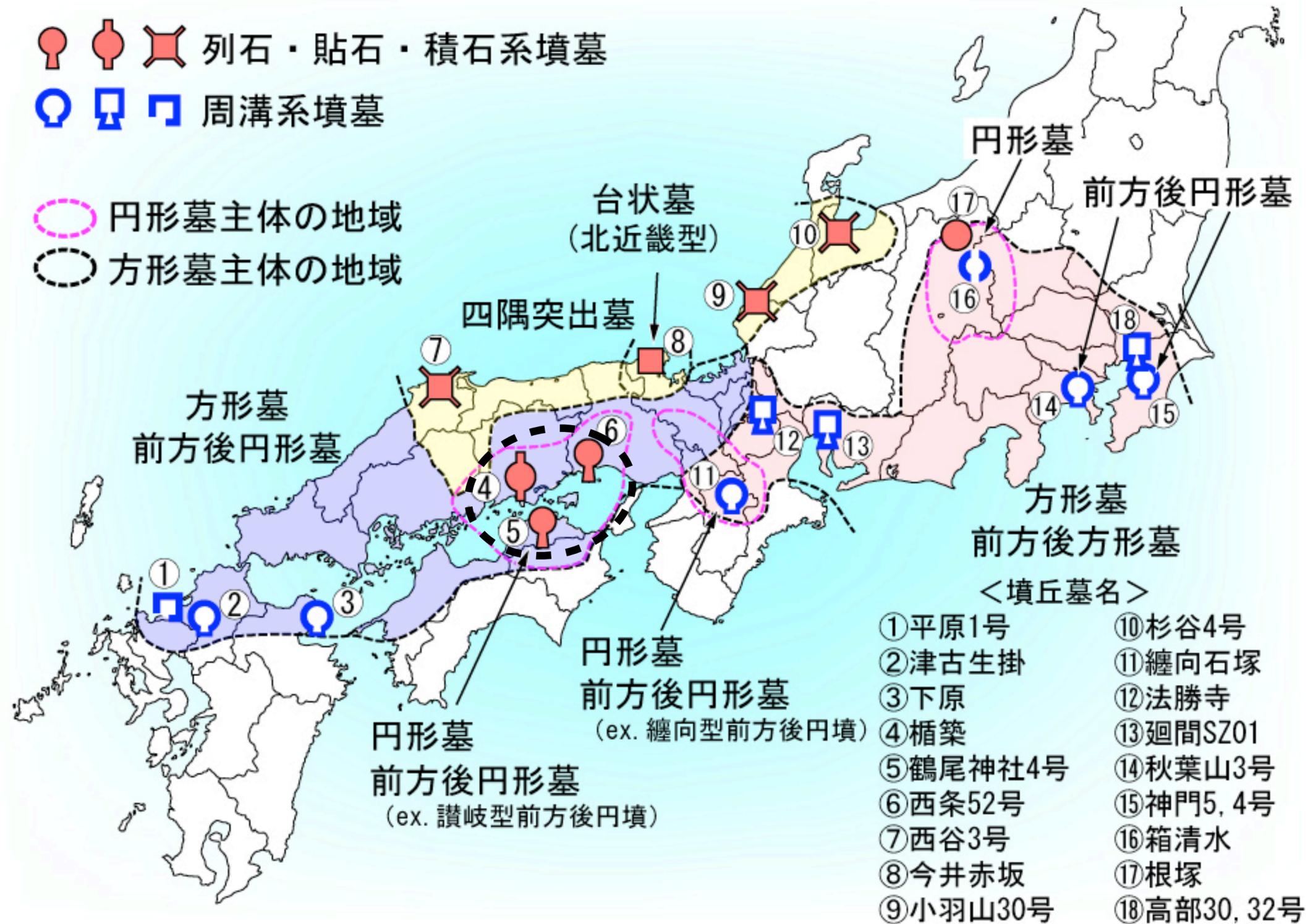
投馬国＝出雲説

狗奴国＝肥後・肥前・吉備連合説



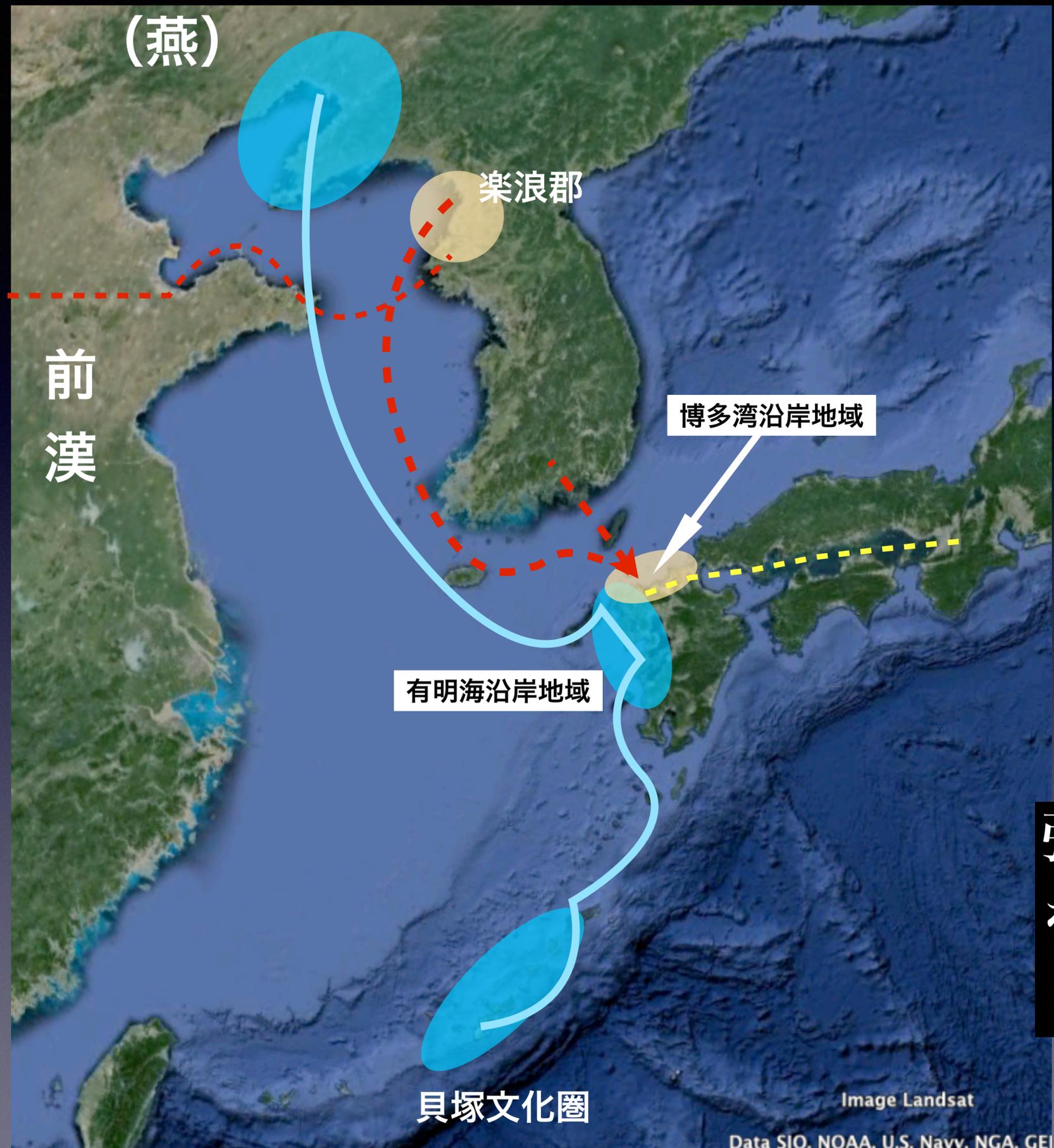
吉備地域（瀬戸内）を迂回したルート選択であった

2世紀後半から3世紀中頃の弥生墳丘墓





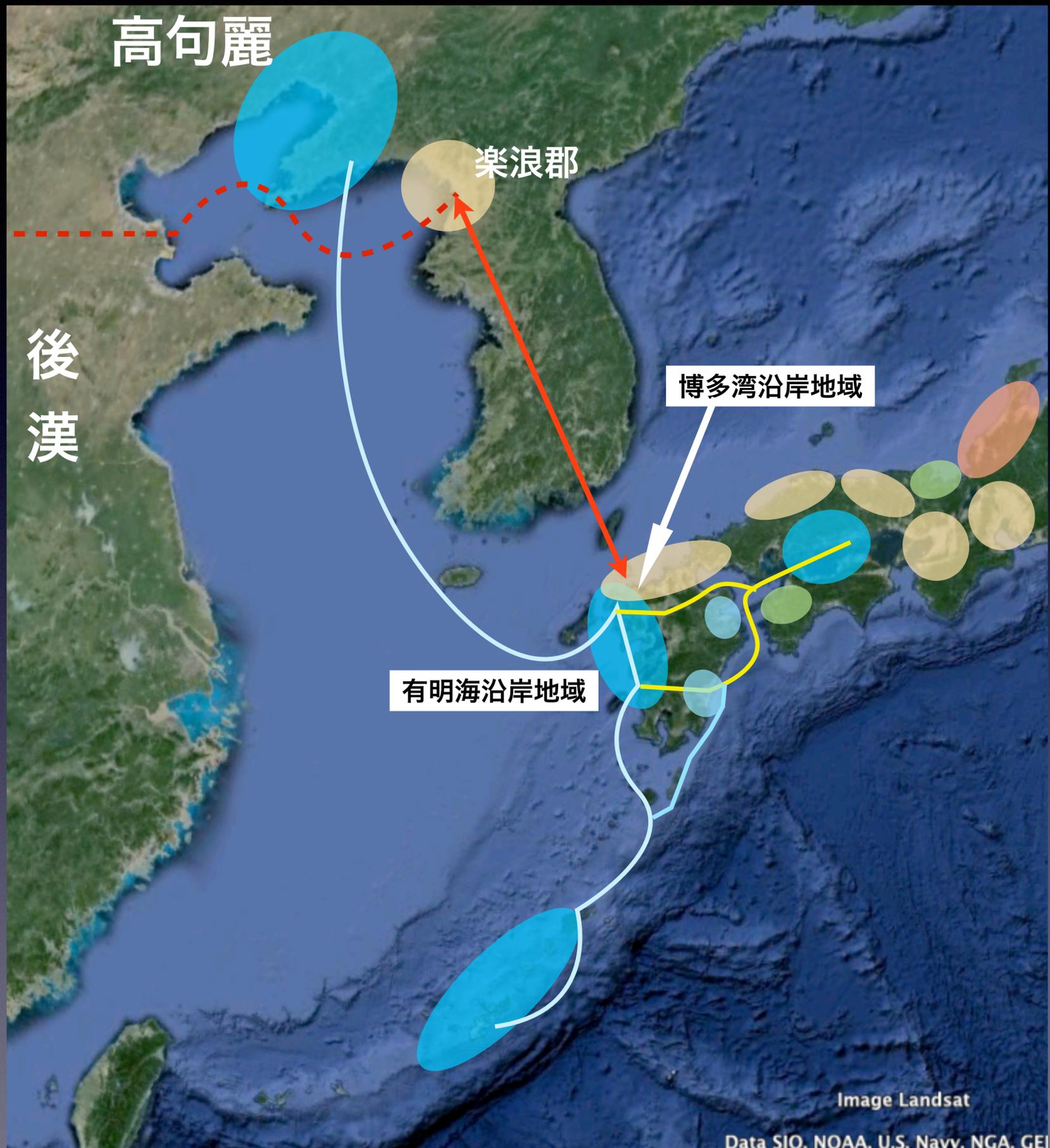
西日本における貨泉の分布 (秋山ほか2013より)



弥生中期段階

鉄を九州内に留め青銅器の原材料だけを東方側一帯に流す

弥生文化社会の秩序を防衛する管理貿易
「鉄に抗する社会」

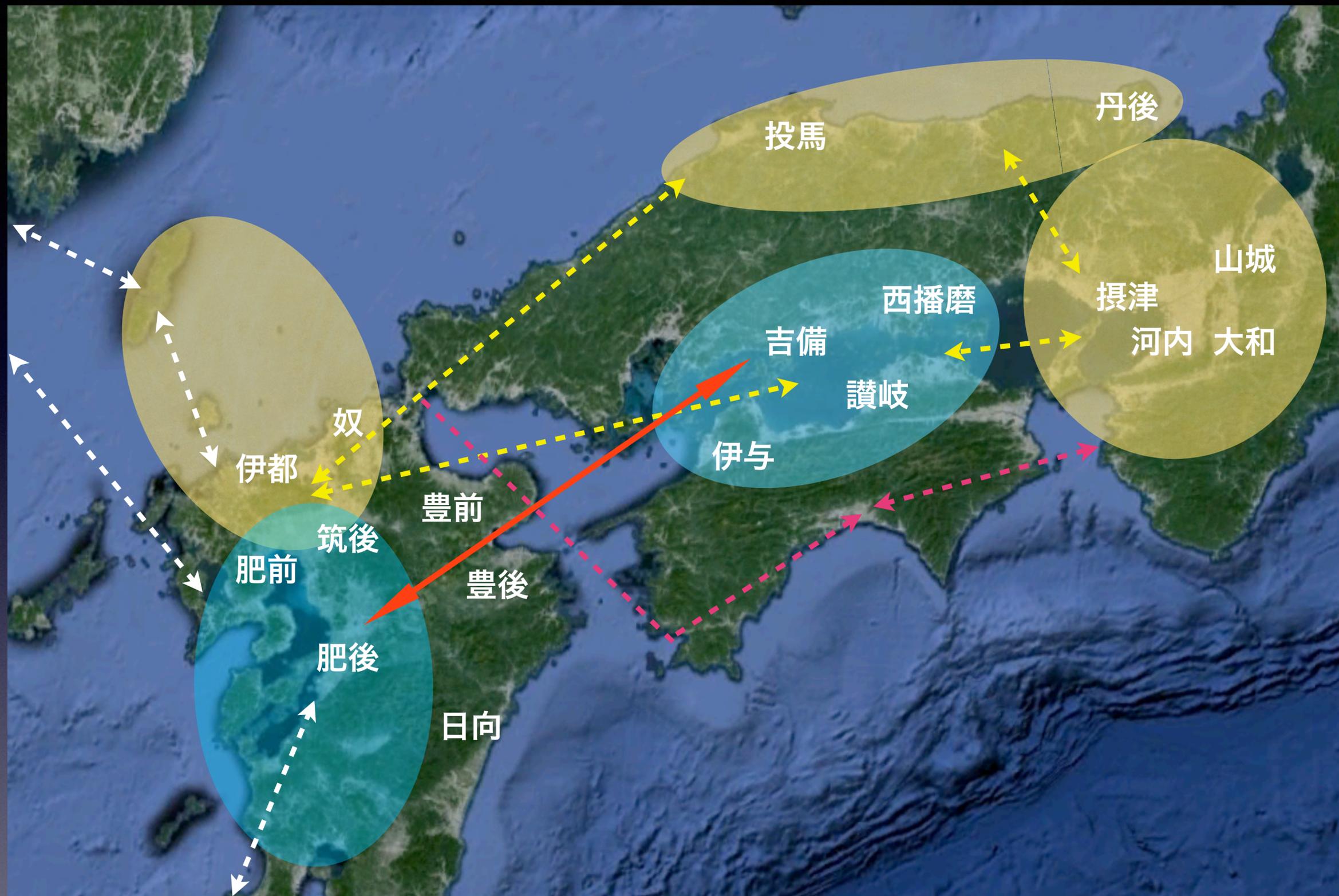


弥生後期段階

後漢の衰退により沿岸部の各地には錯綜した径路で鉄やガラス玉が流入。土器の地域色が顕在化—地域の分裂

「鉄に抗する社会」が崩壊にむかう

吉備・讃岐が独自の動きを開始



2世紀中頃の「倭王帥升」段階に模索された管理貿易体制



魏への朝貢を是とするか否とするかを巡り顕在化した対立関係
239年から247年頃までの一時的な抗争であった可能性が高い

狗奴国 吉備/讃岐・肥前/肥後連合説

基本構図

博多湾沿岸地帯に依存した地域連合
(博多湾—日本海ルート)

競合しつつ連携 → 対立 → 競合しつつ連携

有明海沿岸地帯に依存した地域連合
(有明海—瀬戸内海ルート)

魏への朝貢の是非をめぐる一時的な対立関係

狗奴国 吉備/讃岐・肥前/肥後連合説

時系列でみた推移（1）

倭国乱—卑弥呼の共立

連携

魏への朝貢（239年）

対立

[倭国]

[邪馬台国]（博多湾—日本海ルート勢力）

[狗奴国]（有明海—瀬戸内海ルート勢力）

対立期間のみ
「狗奴国」は
外形上の姿を
現し国と映る

卑弥呼の死（247年頃）

連携

狗奴国 吉備/讃岐・肥前/肥後連合説

時系列でみた推移（2）

卑弥呼の死

連携

男王立つ [狗奴国側か]

対立

台与（二代目卑弥呼）の共立

連携

（西晋）への朝貢（266年）

連携

「狗奴国」は抗争に勝ち、二代目卑弥呼に負けた

纏向遺跡の出現と展開をどうみるか

未開発だった山際への展開と拠点の新規開拓



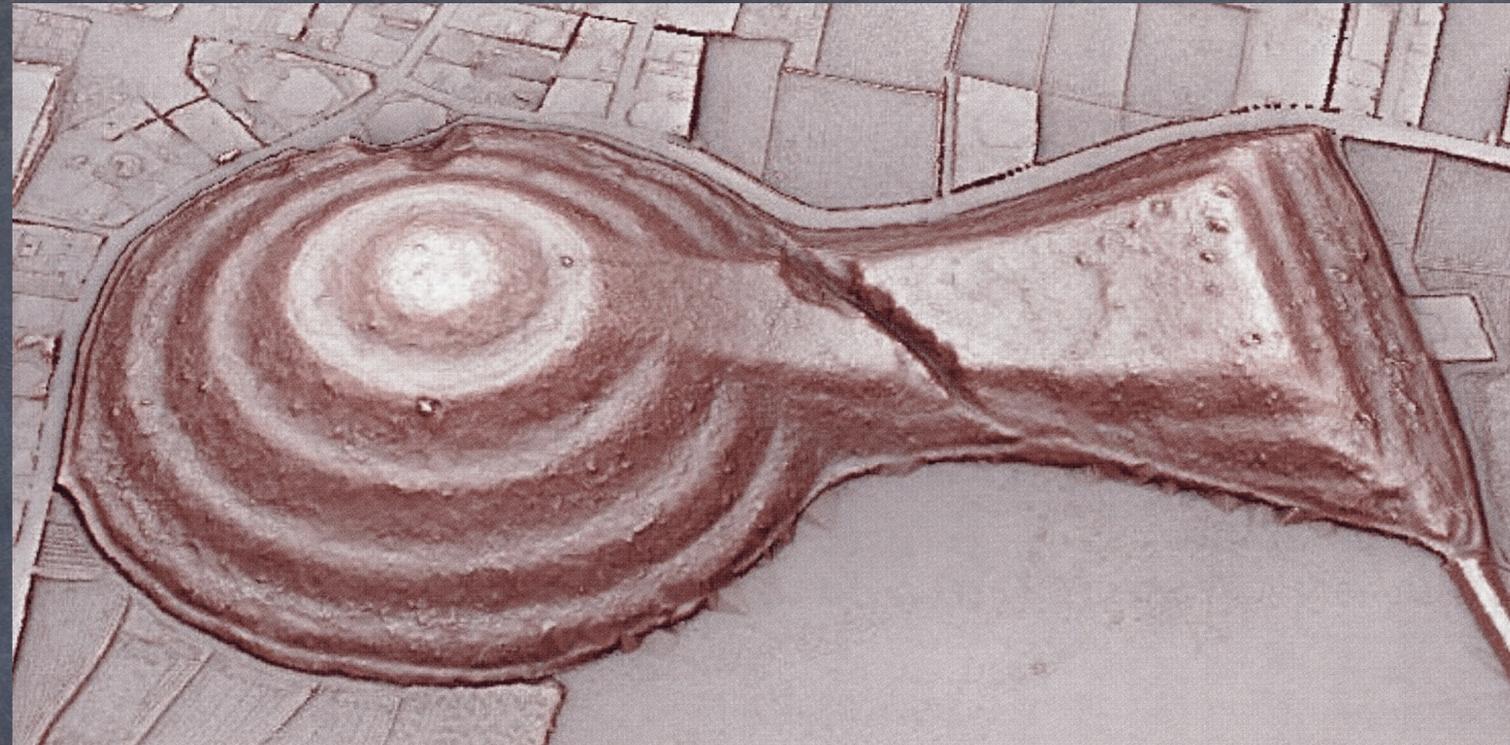
卑弥呼の共立をきっかけとして
始まった社会の構造改革

交易依存型の権力から産業育成型の権威への転換

耕地開発と王墓の造営を一体化させる長期開発事業をテコに列

島内人口の流動化に応え複合産業の活性化を促進させる

王墓と耕地開発を結びつける資料的根拠



段築各段のテラスで地表面の勾配を緩和 =水田開拓技術

異質な土壌を交互に突き固める土盛り=堤・突堤造成技術

暗渠排水路 =溜池取水部の導水技術

葺石 =溜池・港湾突堤の波除け技術

弥生時代の西日本各地で開発された土木技術の集大成

王墓の造成は、参画者に上記の技術を習得させる絶好の場

倭王権が断行した農本主義施策のプロセス

背景 弥生後期に始まっていた集団移住

各地で流動化しつつあった人々を王権の本拠地に誘う

↓ 難民キャンプ・復興住宅

大規模耕地開発と王墓の造営を実施

鍛冶工房など付带的諸産業の市場が確保

酒場・宿（遊郭）など「水商売」関連市場が誕生

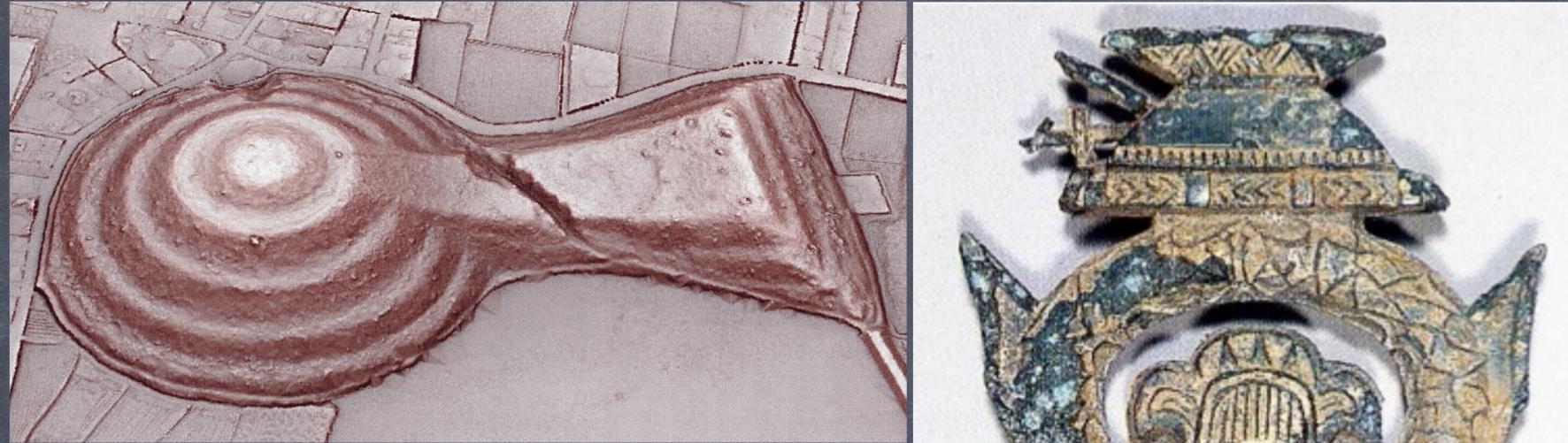
↓ 時限的な都市が出現

王墓が完成 王の
即位儀礼の場となる

大規模開発技術
の習得者を育成

農本主義をまとった
重商主義的施策

前方後円墳は王の即位儀礼の場であったと いう理解の背景（倭人の死生観と他界観）



生は死の準備期間であったとみなされた地域社会の实在（高句麗条）
神は祖霊であり、祖霊祭祀が王権祭祀の根本であった実例（殷代）

墓と理解するには過剰な荘厳さに仕上げられた前方後円墳
簡素で質素な「首長居館」

前方後円墳に埋葬された時点で「遺骸」は王に就任するという理解
新規に築造された「特殊他界」に棲み、子孫を繁栄させる王

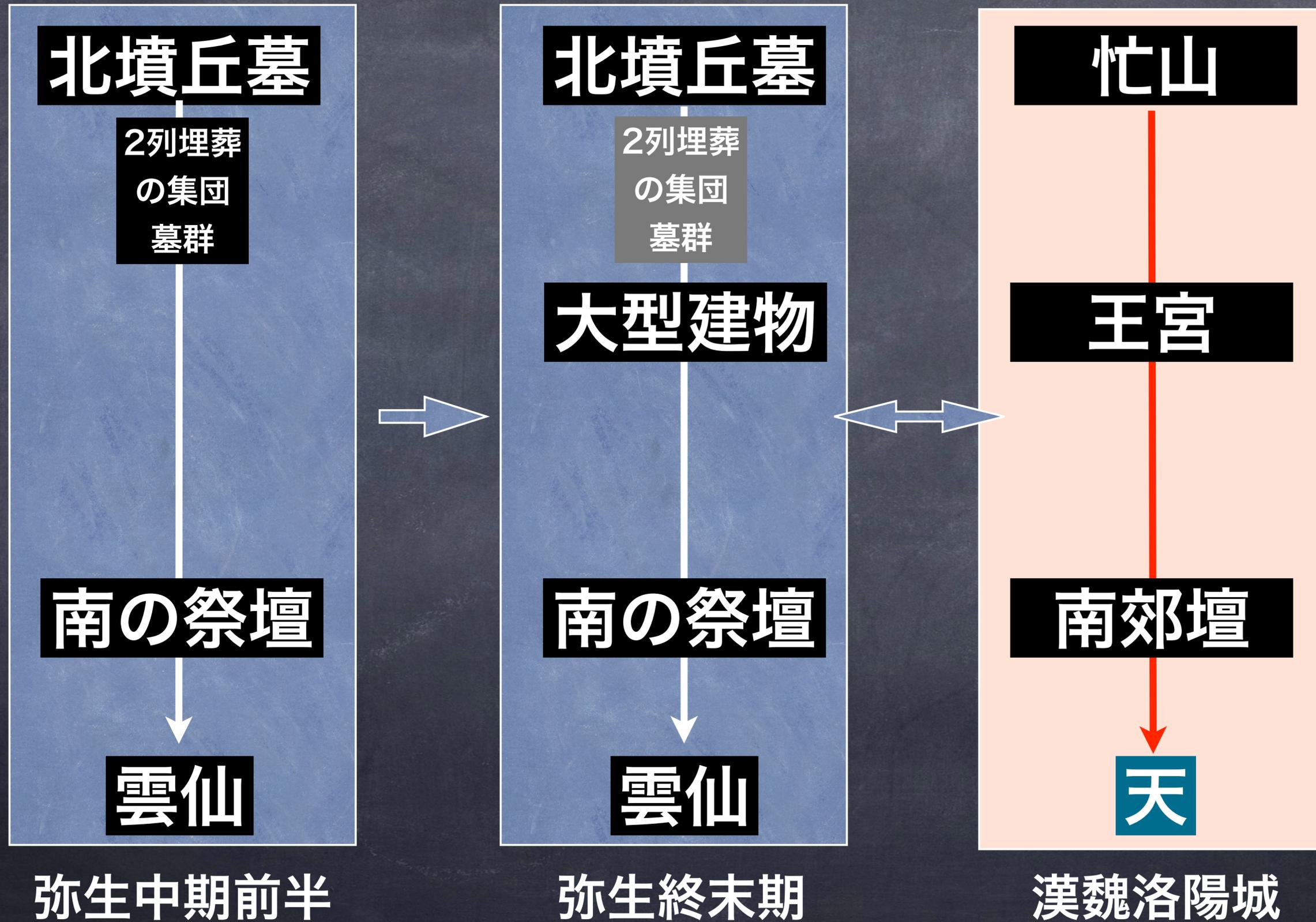
纏向遺跡で展開された「狗奴国」由来の儀礼施設



「頂点他界」に聖別された特殊な山と墳丘墓・祭壇・大型建物を直列配置とする祭儀施設は吉野ヶ里遺跡ほか肥前地域で発達した

纏向遺跡の祭儀施設は肥前の思想を借用し東西軸に揃えたもの

吉野ヶ里遺跡における直列配置の推移



古墳時代の成立過程にかんする私の基本認識

倭王権は大和弥生文化とは異質で外部性が顕著である。

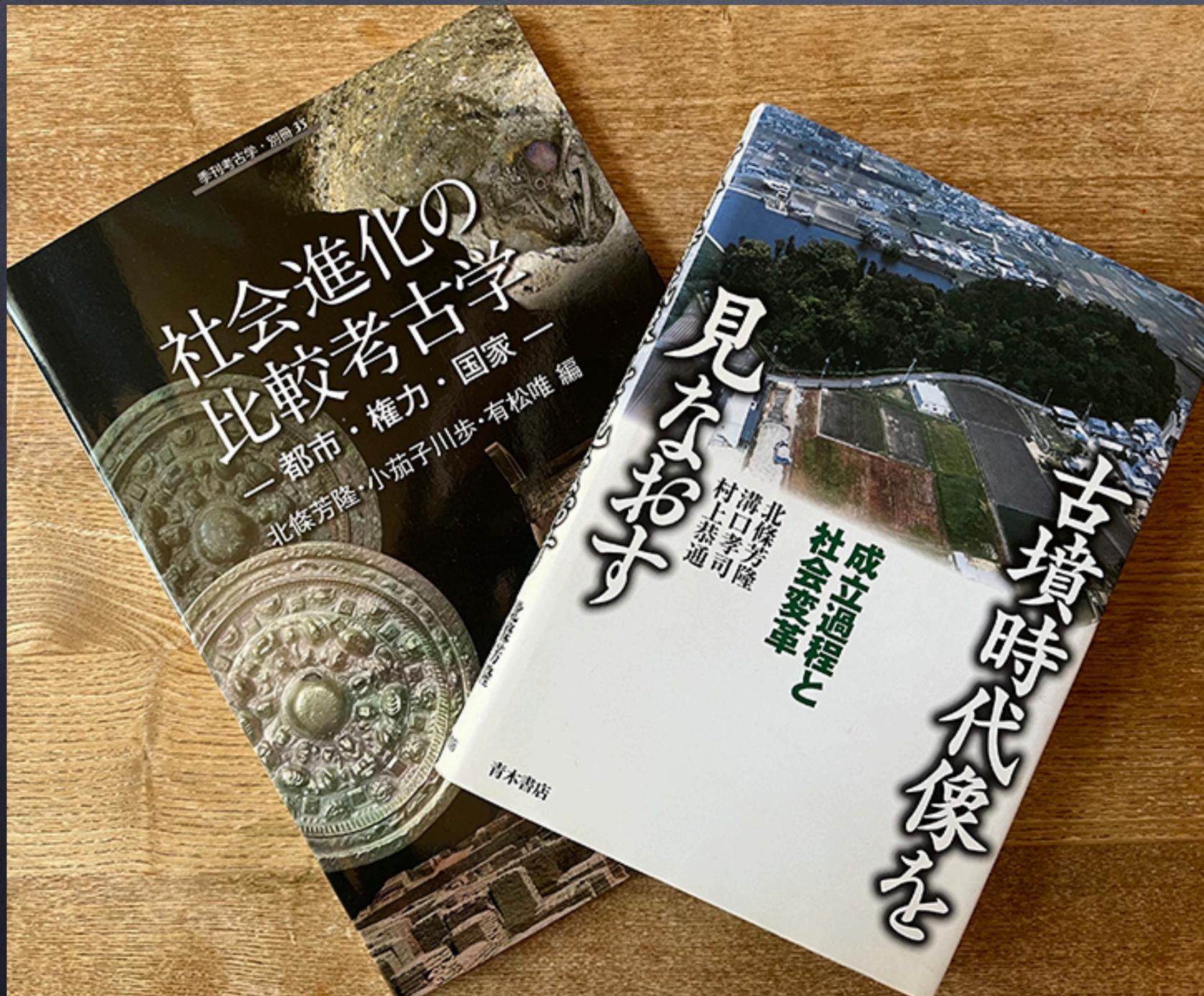
古墳祭祀は各地の特性を集約し再編成した新たな墓制である。

「**求心集約モデル**」

中国文明の亜周辺である日本列島社会の実情に則した国家形成論が必要。

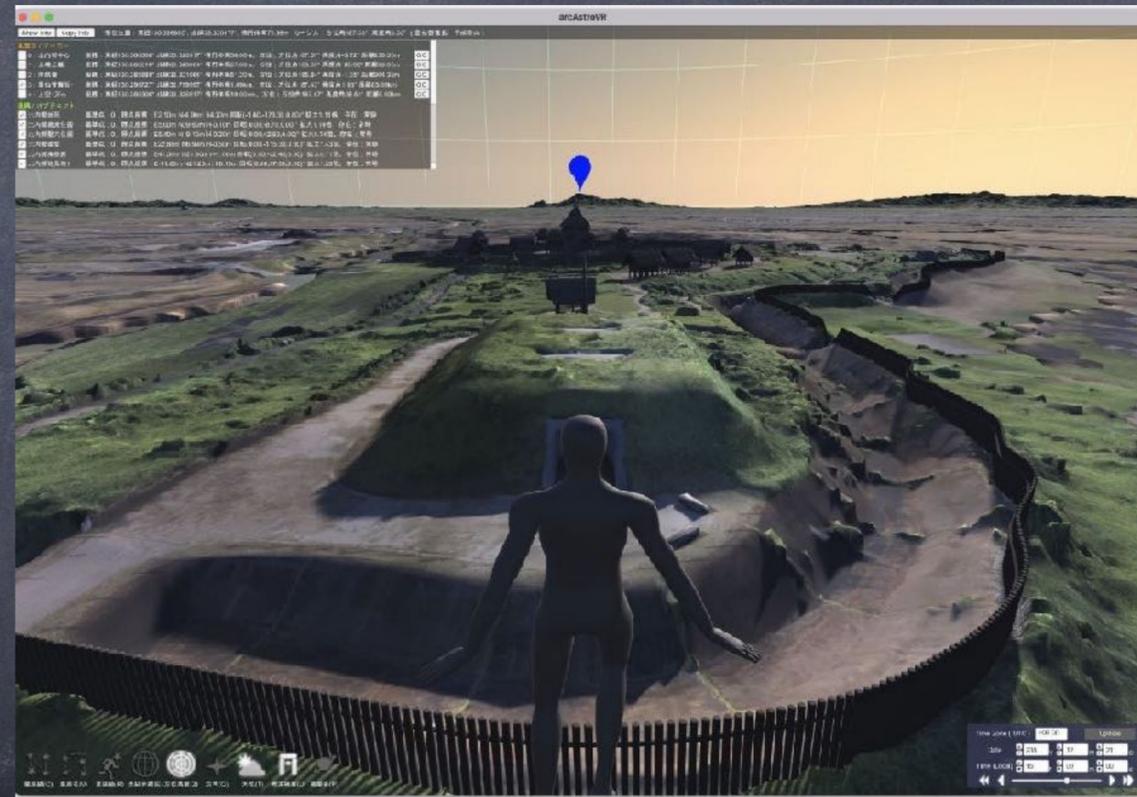
「**東アジア周縁国家**」概念

* 寺沢薫氏の「弥生国家論」・水林彪氏の「共同体・階級国家論」とも関連



考古天文学を景観史に組み込むことの有効性

稲粳建市場経済とその拡大策



おわり